

2017年度 修士論文

清朝末期から中華民国初期（1904 - 1936 年）における
大学スポーツ連盟の成立過程に関する研究
－華東地区を中心に－

The establishment process of the collegiate athletic association during the late Qing
Dynasty and the beginning of the Republic of China (1904-1936):
With a focus on East China

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 スポーツ文化研究領域

5016A047-3

李 声民

LI, Shengmin

研究指導教員： 友添 秀則 教授

目次

序章：問題の所在と本研究の目的

第1節：問題の所在と本研究の目的	2
第1項：問題の所在	2
第2項：本研究の目的	3
第2節：先行研究の検討	4
第3節：本研究の課題および方法	7
第1項：本研究の課題	7
第2項：本研究の方法	7
第4節：本研究における用語の定義	9

第1章：華東地区における教会大学の位置づけ

第1節：中国における教会学校の設立過程	14
第1項：初等中等教育レベルの教会学校の設立	14
第2項：高等教育レベルの教会学校（教会大学）の設立	16
第2節：教会大学の教員および学生の出自とカリキュラムの概要	19
第1項：教会大学の教員の出自	19
第2項：教会大学の学生の出自	20
第3項：教会大学のカリキュラムの概要	22
第3節：本章の総括	26

第2章：華東地区におけるスポーツの導入および国際競技会への出場

第1節：華東地区におけるスポーツの導入	32
第1項：外国人の宣教師による陸上競技の導入	32
第2項：教会大学による野球の導入	33
第3項：在留外国人によるサッカーの導入	36
第4項：YMCAの宣教師によるバスケットボールの導入	38
第5項：外国人の宣教師と教員によるテニスの導入	40

第2節：華東地区の大学生の国際競技会への出場	42
第1項：極東選手権競技大会への出場	42
第2項：1936年ベルリン・オリンピック大会への出場	44
第3節：本章の総括	48

第3章：華東地区における大学スポーツ連盟の組織化

第1節：「中華大学体育連合会」の組織化	53
第1項：「中華大学体育連合会」の名称の由来	53
第2項：「中華大学体育連合会」の設立と解散	54
第2節：華東地区のスポーツ組織の再構築と	
「東華六大学体育連合運動会」の設立経緯	56
第1項：華東地区のスポーツ組織の再構築	56
第2項：「東華六大学体育連合運動会」の成立経緯	58
第3節：「華東八大学体育連合会」の成立と分裂	62
第1項：「華東八大学体育連合会」の成立経緯	62
第2項：「華東八大学体育連合会」の分裂	64
第4節：「四大学体育会」と「江南大学体育協会」の設立と解散	67
第1項：「四大学体育会」の成立と解散	67
第2項：「江南大学体育協会」の成立と解散	69
第5節：本章の総括	73

結章：本研究の総括と今後の課題

第1節：本研究の総括	82
第2節：結論	84
第3節：今後の課題	85

<引用・参考文献一覧>	86
-------------	----

<引用・参考ホームページ一覧>	91
-----------------	----

表・図一覧

表 1-1	1920 年代までに、設立した教会大学（プロテスタント系）	16
表 1-2	正館のカリキュラムの概要	23
表 1-3	広学館のカリキュラムの概要	24
表 1-4	医学館のカリキュラムの概要	24
表 1-5	圣教館のカリキュラムの概要	24
表 2-1	極東選手権競技大会の開催場所，時間および中国の成績	43
表 2-2	中国（中華民国）代表団 26 名の役員	44
表 2-3	1936 年ベルリン・オリンピック大会の選手統計	46
表 3-1	1936 年までに設立された主な体育団体	58
表 3-2	「東華六大学体育連合運動会」歴代（1914－1920 年）優勝者	61
表 3-3	「華東八大学体育連合会」歴代（1920－1926 年）優勝者	63
表 3-4	「四大学体育会」歴代（1928－1931 年）優勝者	68
表 3-5	「江南大学体育協会」歴代（1926－1936 年）優勝者	71
表 3-6	「江南大学体育協会」歴代（1926－1936 年）優勝者	72
表 3-7	大学スポーツ連盟の組織化の状況	75
図 結-1	大学スポーツ連盟の成立過程の概要	84

序章：問題の所在と本研究の課題

序章では、華東地区^{注1)}を中心とした、中国の清朝末期^{注2)}から中華民国初期^{注3)}（1904 - 1936 年）における大学スポーツ連盟の成立過程に関する研究を進めるにあたって、問題の所在と研究の目的、研究の意義などを示していく。第 1 節において問題の所在と研究の目的を述べる。第 2 節において本研究に関わる先行研究の検討をおこなう。第 3 節において本研究の課題および方法を規定する。第 4 節において用語の定義をおこなう。以上の手続きによって、序章において本研究全体の基本方針を示していく。

第1節：問題の所在と本研究の目的

第1項：問題の所在

華東地区は、中国東部の呼称であり、南京市、上海市を中心に、江蘇省、浙江省地帯を総称した長江デルタ地帯のことである。華東地区は交通の便が良い沿岸地域に位置している。また、揚子江が江蘇省と浙江省の主な地域を通過しており、古来より「魚米之郷」と呼ばれた水郷地帯が広がっている。特に、江南デルタは米作の中心地で、生活水準が高い地域である。そのため、欧米の商人や宣教師は、交通の便が良く、人口密度の高い港湾都市が集まっている華東地区に多く集まった（劉，2005）。20世紀初頭には、教会学校で大学教育が展開されるようになり、徐々に大学になっていった（顧，2004，p. 228）。教会大学では、外国人教員が多かったため、外来文化が中国に持ち込まれ、スポーツも教育と同時に行われるようになった。

このように、華東地区においてスポーツは、まず沿岸各地の教会学校に導入され、続いて他の教会学校でも始められるようになった。そして、徐々に中国人が経営している学校でも行われるようになった。そのため、競技会も教会大学同士の対抗戦から始まり、総合競技会へ発展していった。また、華東地区では、全国運動会^{注4)}を開催したり、極東選手権競技大会^{注5)}へ参加する選手を輩出したりした。さらに、華東地区では、大学スポーツ連盟等、様々な体育団体が設立されたという（笹島，1987，p. 148）。

具体的には、1904年に蘇州の東呉大学を中心として、「中華大学体育連合会」が設立された。加盟校は、蘇州の東呉大学、上海のセント・ジョーンズ^{注6)}、南洋（名称が頻繁に変更するため、以下は「南洋」で統一する）、中西書院であった。しかし、「中華大学体育連合」は、南洋、中西書院の脱退より、1909年に解散した（羅，1981，p. 25；羅，2005，p. 31，黎，1984）。

他にも、1914年に東呉大学の提案により、「華東六大学体育連合会」が設立された（羅，1981，p. 25，黎，1982，p. 13）。「華東六大学体育連合会」は、大学数が少なかったが、各学校は積極的に運動会や球技試合に参加した。上海の市民も、大学の競技場まで観戦に来て、大きな盛り上がりを見せたという（上海体育志，1996，p. 101）。1920年になると大学の統廃合を経て「華東八大学体育連合会」が結成された。「華東八大学体育連合会」では、章程と試合細則が定められ、厳密な組織系統が整えられていたという（彭文余，1929，p. 195）。そこでは、特に会員資格、組織の枠組み、会議の議決過程および会員の権利と義

務などが詳細に書かれていた（中華全国体育協進会年刊，1928，pp.255－257；中華全国体育協進会年刊，1928，pp.258－263）。1932年ロサンゼルス第10回夏季オリンピックで、東北大学の学生である劉長春は、中華民国の唯一の代表として、陸上競技100m, 200mに出場し、大学生がオリンピックに参加する先駆けとなった。また、1936年ベルリン第11回夏季オリンピックには、陸上競技・サッカー・バスケットボール・水泳・自転車・ボクシング、ウェイトリフティングの選手69名、役員26名、視察員37名の計132名が大会に参加した（笹島，1987，p. 159）。メダルの獲得者はいなかったが、陸上競技の代表選手23人のうち、19人が大学生または大学卒業生であった（陸，1936）。

つまり、清朝末期は、中国において大学でスポーツが始められただけでなく、大学が中心となってスポーツ組織を設立させていた時期だったのである。しかし、当時の大学スポーツ連盟は、大学間の対立や五・三〇事件などの社会事件の影響で、30年も経たないまま消失してしまった。とはいえ、清朝末期から中華民国初期にかけての中国における大学スポーツ連盟の成立過程を明らかにする作業は、中国におけるスポーツの受容の実態を詳らかにしていく上で重要な課題となるであろう。

しかしながら、これまでの研究では、華東地区における大学スポーツ連盟の成立過程を直接的な研究課題として探究した研究はほとんどみられない。そこで、本研究では、中国の大学スポーツ連盟の源にさかのぼって、華東地区を中心に、大学スポーツ連盟の成立経緯、組織状況と試合の開催状況の検討を通して、清朝末期から中華民国初期（1904 - 1936年）における大学スポーツの組織化の状況について明らかにしていきたい。

第2項：本研究の目的

本研究の目的は、清朝末期から中華民国初期（1904 - 1936年）の華東地区における大学スポーツ連盟の成立過程を明らかにすることである。

第2節：先行研究の検討

本節では、先行研究の検討を通して、先行研究の課題と本研究の位置づけを明らかにしていく。

はじめに、中国の清朝末期から中華民国初期（1904 - 1936 年）における華東地区の大学スポーツ連盟の成立過程に関する先行研究を概観する。つづいて、先行研究に対して批判的検討を行っていく。

中国の清朝末期から中華民国初期（1904 - 1936 年）における華東地区の大学スポーツ連盟の成立過程を直接研究の対象に据えたものは、ほとんど見られないが、清朝末期から中華民国初期（1904 - 1936 年）における中国大学スポーツ連盟の成立過程についての言及が見られる先行研究として、羅（1981, 2005）、黎（1982, 1984）、郭（2013）、高嶋（2015）が挙げられる。

羅（1981, 2005）、黎（1982, 1984）は、1904 年に蘇州の東呉大学を中心として、「中華大学体育連合会」が設立（加盟校は、蘇州の東呉大学、上海のセント・ジョーンズ、南洋、中西書院）したものの、南洋、中西書院の脱退によって 1909 年に解散したことを明らかにした（羅, 1981, p. 25 ; 羅, 2005, p. 31, 黎, 1984）。そして、1914 年 5 月に蘇州の東呉大学、上海のセント・ジョーンズ、南洋、滬江大学、南京の金陵大学、杭州の之江大学の 6 校で、「東華六大学体育連合運動会」が設立され、16 日に、東呉大学で初回の陸上競技会が開催されたことを明らかにした（羅, 1981, p. 25, 黎, 1982, p. 13）さらに、1920 年に上海の復旦大学と東南大学を加え、「華東八大学体育連合会」が新しく設立されたことも明らかにした（羅, 1981, p. 25）。

しかし、これらの研究においては、各スポーツ連盟の組織化の具体的な状況について、詳細な検討が行われていない。また、1920 年以降に設立された「四大学体育会」と「江南大学体育協会」というスポーツ連盟については、分析対象として設定されていない。

郭（2013）は、中国における大学スポーツを研究対象として、中国における大学スポーツの歴史的な展開を 3 つの時期（1890 年代－1937 年、1950 年代－1970 年代、1980 年代－現在）に区分し、近代・現代の中国の大学スポーツの変遷を明らかにした。郭（2013）によると、1890 年代から 1937 年までの期間が、中国において大学スポーツが現れ始めた時期であるという。また、YMCA とミリタリズムは中国の大学スポーツに対して、大きな影響をもたらしたことを指摘した（郭, 2013, pp. 29－33）。そして、1910 年代から 1920

年代の間、大学教育レベルの教会学校、公立・私立学校（大学）は、スポーツ競技会の組織と参加主体であり、またこれらの大学は指導的な立場として、スポーツ普及の役割を担ったことを指摘した（郭, 2013, pp. 33-43）。さらに、1920年代以降の大学スポーツは、中国スポーツの表象と捉えられ、多くの大学生が中国を代表して、1913年から始まった極東選手権競技大会と1932年および1936年のオリンピック大会に出場していたことを明らかにした（郭, 2013, pp. 46-50）。

しかし、中国の大学スポーツは、本論で示していくように、YMCAとミリタリズムの影響だけでなく、教会学校の影響も見逃してはならない。しかし、郭（2013）は、教会学校を直接分析対象に設定していない。また、大学スポーツ連盟の組織化状況については、1904年から1923年までの時期について論じられていたものの、1904年のCIAA（「中華大学体育連合会」を指す）の陸上競技会の開催状況、1914年から1923年までのECIAA（「東華六大学体育連合運動会」を指す）の競技会の優勝者しか述べられていない。また、1904年から1923年の間、各組織の成立経緯と解散原因について、詳細に触れられていない。

高嶋（2015）は、スポーツの近代化や文化交渉の観点から、1890年から1925年までの期間の上海セント・ジョーンズ大学におけるスポーツの歴史を考察する中で、セント・ジョーンズが学校内での教員、カリキュラムが欧米化^{注7）}を優先し、他の教会学校、公立・私立学校よりもっと早く英語で授業を教えることを実施したことを指摘した。そして、学校が欧米化の一環としてスポーツを積極的に導入したと主張した（高嶋, 2015）。また、セント・ジョーンズ学内で、英文の校内雑誌『セント・ジョーンズ・エコー』（SJE: St. John's echo）が創刊され、スポーツとメディアの繋がりが出来たこと、スポーツは現役生とOB・OGを結ぶ役割を果たし、見るスポーツも非常に盛り上がっていたことを示した（高嶋, 2015）。さらに、セント・ジョーンズにおけるスポーツの発展に伴い、極東選手権競技大会に選手を輩出したことも明らかにした（高嶋, 2015）。最後に、セント・ジョーンズの学外スポーツの組織について、1904年にIAA（「中華大学体育連合会」を指す）が設立され、陸上競技会を開催した。また、1914年にECIAAがIAAの元会長の呼びかけより、設立され、1920年に上海の復旦大学と東南大学を加え、華東地区のとっても重要なスポーツ統轄機関になったことを指摘した（高嶋, 2015）。

しかし、高嶋（2015）は、セント・ジョーンズで英語教育が展開されたことを指摘したものの、その他のカリキュラムについて詳細な分析を行っていない。また、学校の教員や学生の出自についても詳細な検討がなされていたとは言い難い。さらに、セント・ジョーンズ

を中心として考察していたため、華東地区の大学における大学スポーツの位置づけについても検討できていない。最後に、セント・ジョーンズの学外スポーツの組織について、1925年までの期間しか考察していないため、1925年以降における各組織の成立経緯と解散原因についても詳細な検討が必要となる。

これまでの研究から、大学スポーツ連盟を直接研究の対象に据えたものは、ほとんど見受けられず、大学スポーツ連盟の成立過程の解明は、いまだ不十分な状況にあることが確認できた。具体的には、先行研究の批判的検討を通して、清朝末期から中華民国初期（1904－1936）を対象時期とすること、教会大学の教員および学生の出自、カリキュラムの概要について検討すること、セント・ジョーンズだけでなく、華東地区の大学を対象として、華東地区におけるスポーツの導入過程および大学スポーツ連盟の成立過程を詳細に検討することが必要となることが導かれた。

第3節：本研究の課題および方法

第1項：本研究の課題

本研究の目的を達成するための具体的な課題として、以下の3点が挙げられる。

まず、中国の清朝末期から中華民国初期（1904－1936）において、華東地区における教会学校の成立過程と教会大学の教員および学生の出自とカリキュラムの概要の検討を通して、華東地区における教会大学の位置づけを明らかにする。

つぎに、華東地区におけるスポーツの導入過程と華東地区の大学生の国際競技会への出場状況を明らかにする。

最後に、華東地区における、大学スポーツ連盟の成立経緯、組織の状況と試合の開催状況の検討を通して、中国の清朝末期から中華民国初期（1904－1936）における大学競技スポーツの組織化の状況について明らかにする。

第2項：本研究の方法

本研究では、新聞、雑誌、著書等の文献を資料として活用し、分析を行う。

具体的には、以下の手順で行う。

まず、教会学校の実態を明らかにするために、『教会学校在中国』、『宣教士与近代中国』、『教会学校と中国教育近代史』、『上海セント・ジョーンズ大学（1879－1952）』、『セント・ジョーンズ大学五十年史略』などの著書や近代中国においてもっとも発行期間の長かった新聞である『申報』^{注8)}を用いる。これらの資料をして、教会学校の実態および教会大学の教員の出自と学生の出自およびカリキュラムの概要を具体的に検討する。

つぎに、華東地区におけるスポーツの導入過程については、『セント・ジョーンズ・エコー』、『中国籃球運動史』、『中国の体育・スポーツ史』、『上海体育史話』、『中国近百年体育史』、『中国近代教育史』などの資料をもって、考察・分析していく。

最後に、大学スポーツ連盟の組織化の過程を明らかにするために、本研究では主に『申報』を用いる。具体的には、各大学スポーツ連盟の会議、体育連合会の開会、各大学の連

【序章】

合会への加入・脱退の状況などに関する報道や記事を収集し、分析を行う。また、各連盟の成立経緯、組織の状況と試合の開催状況などを明らかにするために、『上海交通大学紀事：1896－2005（上巻）』2006年、『東吳年刊』1918, 1923年、『金陵大学校刊』1932年、『中華全国体育協進会年刊』1928年など年刊、年史、校刊記事も資料として扱う。

第4節：本研究における用語の定義

・「スポーツ」

本研究において、「スポーツ」という用語は、『21 世紀スポーツ大事典』（中村ほか編，2015）で，アメリカのスポーツ社会学者であるアレン・グットマンによるスポーツのメルクマークに依拠して友添が定義した，「18 世紀中頃から 19 世紀末までの近代という特殊な時代に，最初はイギリスで，その後引きつづいてアメリカという限定された地域に生まれた独自の論理（資本の論理，自由競争の論理，平等の論理，禁欲的な倫理観，モダニズム）を内包した，大筋活動と競争を伴った身体運動にかかわる独特の形式をもった文化」（友添，2015，pp. 35－37）という意味で用いる．

・「大学スポーツ連盟」

本研究において，「大学スポーツ連盟」は，「中華大学体育連合会」，「東華六大学体育連合運動会」，「華東八大学体育連合会」，「四大学体育会」，「江南大学体育協会」などの総称である．1904 年から 1936 年の期間で，名称がしばしば変更するため，体育連合会，体育運動会，体育会，体育協会が「大学スポーツ連盟」のことを指す．

序章 注釈

注 1) 華東地区は、中国東部の地区名である。一般には上海市と江蘇省、安徽省、浙江省にわたる地域を言うが、中華人民共和国が成立後には、広域的な経済協作区として、これに山東省、江西省、福建省、台湾を加えた広い範囲を華東地区と呼ぶことが多い。

注 2) 清朝 (Qing Dynasty) は、中国の王朝の 1 つであり、1644 年から 1912 年まで中国の最後の統一王朝である。1911 年の辛亥革命と翌 1912 年の中華民国の成立によって滅ぶ。清朝末期は、1840 年から始まった阿片戦争により開国してから 1912 年までの間であり、第一次阿片戦争、第二次阿片戦争、洋務運動、変法自強、義和団の乱、辛亥革命、袁世凱時代を経て、西欧列強の進出と大規模な社会動乱、経済停滞などに苦しんでいた時期である。

注 3) 辛亥革命の翌年、1912 年元旦、孫文 (孫中山) が臨時大総統に就任し、中華民国が成立した。首都は南京に置かれた。「民国〇〇年」という年号は 1912 年を元年として、現在でも中華民国 (台湾) で使用されている。中華民国初期は成立してから 30 年間の間を指す。

注 4) 全国運動会とは、1949 年に中華人民共和国が成立後に行われるようになった競技会ではなく、本研究で扱う全国運動会は中華民国時代に 1914 年から 1948 まで 6 回の大会を開催した運動会である。

注 5) 極東選手権競技大会とは、アメリカ YMCA からフィリピンに派遣されていたエルウッド・ブラウン (1883 - 1924 年, Elwood S. Brown) の提唱で 1910 年に設立された競技大会である。参加国はフィリピン、中華民国と日本 3 カ国であり、初回 (1913 年) はマニラ、次回 (1915 年) は上海、第 3 回 (1917 年) は東京であった。

注 6) セント・ジョンズは、アメリカ聖公会の教会学校で 1879 年に設立された。当初は「セント・ジョンズ書院 St. John's College」という名称である。1905 年にはアメ

リカで大学の登記をおこない、正式な大学として認められ、セント・ジョンズ書院はセント・ジョンズ大学 St. John's University となった。位置づけとしては明治日本の第一高等学校に相当するといえよう。本論文では、セント・ジョンズで扱う。

注 7) 欧米化とは、アメリカとカナダの北アメリカ 2 か国およびヨーロッパの先進国を合わせた集団を指し、当時これらの地域の学問を中国でそのまま教えることであり、「西学」ともいえる。

注 8) 「申報」は、近代中国においてもっとも発行期間の長かった、そして強い影響力を持っていた新聞の 1 つである。中国の清朝の 1872 年 4 月 30 日に創刊され、1949 年 5 月 27 日に廃刊になるまで、通算 77 年間継続し、25600 号までを発行した。イギリス人貿易商のアーネスト・メジャーが創立した。「申報」早稲田大学電子版資料：<http://spwaseda.egreenapple.com/WEB/INDEX.html>。

序章 引用・参考文献

- 顧長生（2004）宣教士与近代中国（増補本）．上海：上海人民教育出版社．
- 笹島恒輔（1987）中国の体育・スポーツ史．ベーススポーツ・マガジン社：東京．
- 高嶋航（2015）上海セント・ジョーンズ大学スポーツ小史．日本当代中国研究, 4, 303 - 345.
- 郭振（2013）中国の大学スポーツ研究：三つの時期における大学スポーツの展開，再構築および発展の検討．早稲田大学 2013 年度博士論文．
- 黎寶駿（1982）華東六大学体育連合会．上海体育史話：上海, p. 13.
- 黎寶駿（1984）セント・ジョーンズ大学体育史略．上海体育史話, 第 9 期, 1984 年 12 月, p. 11－35.
- 羅時銘（1981）解放前の華東八大学体育連合会．体育史料第四輯, 北京：人民体育出版社．
- 羅時銘（1985）浅談基督教青年会は中国近代体育史上での作用．成都体育学院学报, 4：18－24.
- 羅時銘（2005）奧運会来到中国．北京：清華大学出版社．
- 劉建輝（2005）近代中国におけるプロテスタント宣教師の文化活動：上海・墨海書館を中心に．日本研究：国際日本文化研究センター紀要, 30：pp. 295－304.
- 陸翔千（1936）参加第十一回世界運動会中華代表团大事記．体育季刊, 2（3）：p. 465.
- 中村敏雄ほか編（2015）21 世紀スポーツ大事典．大修館書店．
- 彭文余（1929）東吳体育紀略．東吳年刊．
- 上海体育志（1996）上海：上海社会科学院出版社．
- 友添秀則（2015）スポーツの定義．中村敏雄ほか編, 21 世紀スポーツ大事典．大修館書店, pp. 35－37.
- 中華全国体育協進会年刊（1928）華東大学体育連合会章程．上海：中華全国体育協進会, 1928 年 08 月, 第 1 期．
- 中華全国体育協進会年刊（1928）華東大学体育試合細則．上海：中華全国体育協進会, 1928 年 08 月, 第 1 期．

第 1 章：華東地区における教会大学の位置づけ

華東地区は、中国東部の呼称であり、南京市、上海市を中心に、江蘇省、浙江省地帯を総称した長江デルタ地帯のことである。華東地区は交通の便が良い沿岸地域に位置している。また、揚子江が江蘇省と浙江省の主な地域を通過しており、古来より「魚米之郷」と呼ばれた水郷地帯が広がっている。特に、江南デルタは米作の中心地で、経済と生活水準が高い地域である。したがって、欧米の商人や宣教師は、交通の便が良く、人口密度の高い港湾都市が集まっている華東地区に多く集まった（劉，2005）。主要な都市は上海、南京、蘇州、杭州などがある。

20 世紀初頭には、教会学校で大学教育が展開されるようになり、徐々に大学になっていった（顧，2004）。本章では、華東地区における教会学校の成立過程と教会大学の教員および学生の出自とカリキュラムの概要の検討を通して、華東地区における教会大学の位置づけを明らかにすることを目的とする。

第 1 節：中国における教会学校の設立過程

1840 年から始まった阿片戦争^{注 1)}に敗れた中国は、南京条約^{注 2)}によって開国^{注 3)}した。その影響で、西欧諸国が中国に進出する機会が増加した。西欧諸国は、中国において経済的・政治的・軍事的な面はもちろん、文化的、宗教的活動も行うようになった。そして、主要な文化的活動の 1 つである教育活動は、教会学校を中心に展開されていった。本節では、中国における教会学校の設立過程を明らかにしていく。

第 1 項：初等中等教育レベルの教会学校の設立

教会学校は、中国での宣教を目的とし、現地の宣教師や信徒を養成してきた（史ほか、1988, p. 42）。中国でもっとも古い教会学校は、1839 年にアメリカ人ブラウンがマカオで設立した「馬礼遜学堂」である（雷孜知、2008, p. 91）。1842 年に阿片戦争を終結させるためにイギリスと結んだ南京条約により、中国が開国して以降、教会学校は相次いで設立された。特に、華東地区など裕福な開港場のある所に多く設立され、プロテスタント系よりカトリック系の方が多かった。

開国以降の中国において、教会が設立した初等教育は幼稚園と小学校教育が含まれている。19 世紀の中頃までに、教会が運営する学校の多くは小学校であったが、規模が小さく、子供が 2, 3 人だけの学校もあった。学校に通う子供たちの多くは貧しく、孤児もいた（史ほか、1988, p. 46）。教員は宣教師本人もしくは宣教師の妻であった（顧、2004, p. 232）。しかしながら、1860 年頃には、教会学校に通う子供の数は増加し、広州、上海、南京、北京をはじめとした主要都市に集中するようになっていった（熊、1988, p. 399）。

1860 年代半ば以降、教会学校は沿岸各地から内陸まで徐々に発展した。1875 年、全国の教会学校の総数は約 800 校であり、学生の総数は約 20000 人であった。その中の約 350 校がプロテスタント系の教会学校であり、学生数は約 6000 人、残りはカトリック教会によって設立された。800 校のうち約 93%が小学校であった。その中でも寄宿小学校が数多くあり、女子小学校の数もかなり増加している。

そして 1870 年代以降、児童が 100 人以上に達する学校も出てきた。そして、これらの大規模校に通う子供たちは富裕層であった。また、中国人の教員も増加した。1900 年まで

に、全国の教会学校の数、2000 校に、学生数は 40000 人に達した。そのうちの 90%が小学校のレベルであった。さらに、教会学校も都市から田舎に広がっていた。その間、幼稚園も開設し始めた。同時期に、中国では、積極的に欧米化を目指す洋務運動^{注 4)}が展開されるようになった。この運動の影響によって、徐々に中等教育レベルの教会学校が設立されていった。

具体的には、1877 年に山東省の登州でキリスト教の宣教師によって開かれた会議において、中国の教育問題に関する議論がなされた。会議では、パンフレット配布による宣教ではなく、教会学校の拡大を通じた宣教が中国での布教活動を展開していく上で重要になるとの見解が示された。そして、アメリカの教会によって、新たな教会学校が設立されていった（史ほか、1988, pp. 43-44）。

例えば、1881 年に、監理会の林樂知によって、上海に中西書院が、美以美会によって、福建で鶴齡英華書院が設立された。ほかにも、1890 年に監理会によって、中西女塾（上海）、1900 年に、ロンドン会によって、中西書院（天津）が設立された。これらの教会学校に入学するためには、年齢が 12 歳以上 18 歳未満で、かつ小学校レベルの教会学校を卒業していることが条件であった。また、入学した学生は、年齢や学力のレベルに応じて、クラスが分けられ、入学時の年齢に関係なく 18 歳になる年に卒業しなければならなかった。これらの教会学校は設立当初から、中国政府からの財政支援を受けていた。これらのことにより、元の教会の学校を刺激し、コースの内容を更新し、学習環境を改善することを求めた。

以上から、1870 年以降、教会学校における中等教育制度の確立が始まった点、プロテスタント系よりカトリック系の教会学校が多かった点が確認された。これらの教会学校は、次章および第 3 章で詳述していくように、中国における欧米の教育やスポーツの伝播の役割を果たしていった。

第 2 項：高等教育レベルの教会学校（教会大学）の設立

前項でみてきた通り、清朝末期には、初等教育が教会学校の主流となり、徐々に中等教育も普及していった。中華民国が成立して以降、教会学校は、高等教育にも拡大していった。実際に、1921 年には中国全体で公立と私立の大学が 8 校、教会大学は 16 校存在していた。公立・私立の大学と異なり、教会大学は、中国政府の管轄外であり、「外国文化租界^{注 5)}」と同じであった（王，1994，pp. 234－241）。その結果、アメリカとイギリスで流行していた陸上競技や球技などが、教会大学を通して中国に導入された。

以下の表 1－1 は、1920 年代までに設立したプロテスタント系の教会大学の一覧である。

表 1－1. 1920 年代までに、設立した教会大学（プロテスタント系）

教会大学名	地区	創立時間（年）	合併&由来	所属教会
蘇州東呉大学 (Soochow University)	華東	1901	蘇州博習書院、上海中西書院、蘇州中西書院の合併	アメリカの監理会
上海セント・ジョンズ (Saint John's University)	華東	1905	上海培雅学堂、度恩学堂の合併、初名：セント・ジョンズ書院	アメリカ聖公会
杭州之江大学 (Hangchow University)	華東	1910	寧波崇信義塾→杭州育英義塾→杭州長老会学院	アメリカ（長老会、南長老会）
成都華西協合大学 (West China Union University)	西南	1910	華西教育連盟	アメリカ（浸礼会、美以美会）、イギリス（聖公会、公信会）、カナダ連合会
武昌華中大学 (Central China University)	華中	1910	長沙雅大学、武昌文華大学などの合併	アメリカ（聖公会、復初会、雅礼会）、イギリス（ロンドン会、循道会）
南京金陵大学 (University of Nanking)	華東	1911	南京匯文書院、宏育書院の合併	アメリカ（浸礼会、美以美会、長老会、基督会）

【第 1 章】

上海滬江大学 (University of Shanghai)	華東	1915	初名：浸会学院	アメリカの南北 2 つの浸礼会
南京金陵女子大学 (Ginling College)	華東	1915	なし	イギリスロンドン会, アメリカ (浸礼会, 監理会, 美以美会, 聖 公会, 長老会, 復初会, 雅礼会, 基督会), スミス女子学院
広州嶺南大学 (Lingnan University)	華南	1916	初名：格致書院	アメリカ長老会, アメリカ基金委 員会
福州福建協和大学 (Fukien Christian University)	福建	1916	初名：福建協和大学	アメリカ (公理会, 美以美会, 歸 正会), イギリス聖公会
福州華南女子文理学院 (Hwa Nan College)	福建	1917	福州女子学院予科→華南 女子学院	アメリカ美以美会
済南斎魯大学 (Cheeloo University)	山東	1917	初名：山東基督教大学	アメリカ (公理会, 美以美会, 長 老会, 南長老会, 信義会) とイギ リス (浸礼会, 長老会, 循道会, 英行教会), カナダ連合会
燕京大学 (Yenching University)	華北	1919	匯文書院, 華北協和女子 大学, 通州協和大学の合 併	アメリカ (長老会, 美以美会, 公 理会), イギリスロンドン会, アメ リカロックフェラーグループ, ブ リンストン財団, ニューヨーク信 託部, ハーバード燕京社

(教会学校在中国, 2003) (中国近代教育史, 1994, pp. 239-240)

をもとに筆者が作成

表 1-1 から読み取れるように、13 校のプロテスタント系教会大学のうち、6 校が華東地区の大学であった。また、東呉大学とセント・ジョンズは、当時もっとも有名な教会学校であった。というのも、東呉大学は、中国の最初の私立大学であり（王，2000）、セント・ジョンズは 1952 年に中華人民共和国政府によって解散されたが、19 世紀後半から 20 世紀初頭に中国の上海にあるアメリカの聖公会によって設立された高等教育の権威ある機関であり、中国でもっとも古い学校であり、東方のハーバード大学として知られている（熊ほか，2007）からである。

また、カトリック系の教会大学は上海震旦大学（1903 年）、天津塘沽大学（1923 年）、北京輔仁大学（1925 年）の 3 校である。当時、中国の国立大学は北京大学（1912 年）、天津北洋大学（1913 年）、山西大学（1918 年）の 3 校であり、私立大学は北京朝陽大学（1912 年）、北京中国大学（1913 年）、武昌中華大学（1915 年）、天津南開大学（1919 年）と福建廈門大学（1921 年）の 5 校であった（王，1994，p. 241）。

上で確認してきた通り、当時の教会大学は、公立・私立の大学よりも多く存在していた。また、先述の通り、教会学校は、あくまでも宣教を目的として設立された学校であった。実際に 1877 年には、中国全土の宣教師大会で、アメリカの宣教師の狄考文（中国名）マーテル（C. W. Mateer）が登州の文会館にて、教育は宣教の手段であることを明言していたという（王，1994，pp. 234-241）。つまり、教会大学においても、あくまでも究極の目的は宣教であった。

では、これらの教会大学の教員や学生の出自はいかなるものであったのか、また、どのようなカリキュラムに基づいて教育がなされていたのだろうか。次節にて検討していく。

第 2 節：教会大学の教員および学生の出自とカリキュラムの概要

本節では、教会大学の教員および学生の出自とカリキュラムの概要を明らかにする。具体的には、教員の国籍、女子学生の割合、学生の出身、新入生の教育背景、学生の数、学生の宗教信仰等について確認していく。さらに、セント・ジョーンズを例として挙げ、教会大学のカリキュラムの概要を明らかにする。

第 1 項：教会大学の教員の出自

早期の中国の教会大学の教員は基本的には宣教師が担当し、多くの教員は教育のために中国に来るわけではなく、宣教を目的としていた（史ほか、1998, p. 42）。そして、多くの教員は宣教師であったため、教育の専門家ではなかった。中国の教会大学は、主にアメリカとイギリスの宣教師協会によって設立され、教員もこれらの 2 カ国からきた。また、アメリカの宣教師はほとんど大学の学士の学位を持っており、中国で教える知識もアメリカの大学と同様であった。一方、イギリスの宣教師の多くは、大学を卒業していないため、十分な知識を身につけているとは言い難い状況であった。ここから、教会大学の教員の学問的素養は、イギリスよりもアメリカ出身の教員の方が高い水準にあったといえるだろう。それにもかかわらず、1920 年代の前に、中国の大学教員が欧米からの教員の半分以上が占められている（顧、2004, pp. 250－251）。中華統行委弁会調査特委会によると、多くの外国人教員の数よりも、1920 年に中国でプロテスタント系大学の中に、南京の金陵大学、東呉大学、上海のセント・ジョーンズと文華大学にいる外国人教員の数が中国人教員より多かった。それは、全部で 229 人の中国教員と 265 人の外国人教員がいる（中華統行委弁会調査特委会、2007, p. 1133）。

欧米の宣教師は、中国の教会大学で教員をやる前に、中国語と中国文化を学ぶことが必須であり、授業を担当する前に 1 年間中国語と中国の文化の勉強に専念することが求められ、中国での各地に中国語学校が設置されていた。中国古代の科举制度^{注 7)}の廃止（1905 年）と新しい教育カリキュラムの提唱に伴ない、中国の教会大学は、資格のある教員の需要が急増し、欧米からの宣教師の派遣だけで、中国の教会大学の教員数が足りていない状況であった。そして、中国の教会大学が中国人の教員を採用するようになり、教会大学

の中国人教員も徐々に増加していった（杰西，1988，p. 47）。また，中国の教会大学の卒業生のうち，30%が大学教員を務めている．この割合は1937年に38%に上昇した（徐，1999，p. 1）．さらに，教員の任命は，一般的には中国の教会大学から要求されてから，欧米の宣教師が派遣された．その後，欧米の教会によって任命された．教員への給料も欧米の教会によって支払われた．一方，中国の教員は，学校長と管理委員会によって任命され，学校から支払われる．教会大学の中で，教員の中国の任命は，主に学部長の責任であり，校長と理事会は承認のための唯一の責任であるため，中国の教会大学が優れた中国人教員を募集することは常に困難であった（譚，1995，pp. 62－63）．つまり，教会大学では，外国人教員が多かったため，外来文化が中国に持ち込まれ，スポーツも教育と同時に行われるようになった．

第2項：教会大学の学生の出自

中国社会における中国の教会大学の特別な地位のために，中国の教会大学と他の公立・私立大学の構成には大きな違いがある．さらに，中国の教会大学が徐々に教育に焦点を移すにつれて，中国の教育制度上の高等教育として位置づけられるようになった．その結果，教会大学の学生の構成も変化していった．

まず，中国の大学において，初めて男女共学が実施されたのは，教会大学であり，その後，公立・私立の大学でも実施されるようになっていった．教会大学の女子学生の数は，公立・私立大学より多くないが，男子学生と女子学生の学生の割合を見ると，教会大学の女子学生は教会大学全体の学生数の割合が公立・私立大学より高かった．例えば，1922年に，公立・私立大学の学生の合計数は10535人，女子学生は総数の3.8%を占め，405人である．一方，教会大学の学生の合計数は4020人，女子学生は総数の8.71%を占め，350人である（杰西，1988，p. 128）．

また，創設期の教会大学は，中国の富裕層にとっての一般教養であった儒教教育を提供していなかった．そのため，教会大学の学生の主な出身は，中国の貧しい家庭が大半であり，学生たちは教会大学から無償で教育を受けることができた．そして，学生のほとんどは，家族でキリスト教を信仰していた（羅，2004，p. 226）．しかし，このような状況は中国古代の科举制度の廃止（1905年）と洋務運動の台頭によって変わり，中国の教会大学

が徐々に裕福な家庭の大学になっていった。また、当時の教会大学は、中国政府から十分な補助金を受け取っていなかったため、授業料は学校にとって重要な資金源になっていた。裕福な家庭の子弟が教会大学に入学し、高い授業料を支払うことで、教会大学の経営は、成立していたのであった。これらの学生の親は、商人階級や公務員が多く、英語を学ぶことを主な目標としていた。

さらに、中国の教会大学の学生は、ほとんどが中等教育レベルの教会学校から入ってきた。中等教育レベルの教会学校出身の学生は、キリスト教の信仰と高い英語力を有していたため、教会大学は、それらの学生の入学を優先した。実際に、中等教育レベルの教会学校の卒業生のうち、いくつかを免除することがある。例えば、セント・ジョンズの入学試験を免除できる学校はセント・ジョンズ YMCA 高校、上海 YMCA 高校、上海民利高校、セント・ピーター教区学校、馬遜学校、セント・マリア堂と中西女中であつた。また、学生の出身地はほとんど教会大学にある地域であるが、他の地方、さらには海外の学生もいる。例えば、セント・ジョンズの校長のト舩斎（中国名）ポット (F. L. H. Pott) 注⁸⁾ が 1904 年から 1905 年の年度報告に、セント・ジョンズの学生は、香港とハワイを含む 8 つの地域から来て、セント・ジョンズの 1922 年の卒業生の 50%は華東地区、33%は華中地区、15%は華南から来たと述べていた (F. L. H. Pott, 1905-1905)。

中国教会大学における 1899 年から 1900 年までの学生の総数は 127 人で、1910 年から 1911 年までの学生の総数は 878 人で、1919 年から 1920 年の学生の総数は 1691 人で、1929 年から 1930 年までの学生の総数は 4285 人、1936 年から 1937 年までの学生の総数は 6668 人である (芳衛廉, 2005, p. 249)。つまり、1899 年から 1937 年にかけて、中国の教会大学の学生数は増加しているが、教育の質を確保するために、多くの教会大学が 1920 年以降の学生数を厳しく管理し始めている。例えば、1927 年から 1936 年の輔仁大学の入学率は、それぞれ 68%, 66%, 56%, 45%, 38%, 22%, 41%, 49%, 39%, 31% であり、1931 年から 1936 年までの卒業率は、32%, 50%, 58%, 43%, 40%, 52% であつた (孫, 2004, pp. 45-46)。つまり、輔仁大学では、入学・卒業ともに容易ではなかった。当時のほかの教会大学も同じような状況であり、教会大学の卒業生は、優秀な人材であつた。

以上のことから、中国の教会大学、特に華東地区においては運営理念の変化に伴い、女子学生の割合、学生の出身、新入生の教育背景、学生の数、学生の宗教信仰も大きく変わった。

以上より、教会大学では、女子学生および非キリスト教徒の学生が徐々に増加していったことが確認された。では、教会大学のカリキュラムはいかなるものであったのか、次項にて検討していく。

第 3 項：教会大学のカリキュラムの概要

前述したように、中国古代の科举制度は、1905 年に廃止された。したがって、当時では、教会大学、特に華東地区の教会大学のカリキュラムはより欧米化になる傾向がある。また、教会大学の中国人教員の不足と相まって、教会大学では、公式言語として英語が使われていた。実際に、セント・ジョンズ、嶺南大学、東呉大学など沿岸部の港に面している地域の教会大学は、ほとんど学内での正式な言語が英語であった。之江大学、滬江大学などの教会大学は、学内の正式な言語が英語ではないものの、中国語の授業で英語が使われる場合が多く、英語がカリキュラムとして扱われている。

当時、教会大学のカリキュラムは、主にアメリカとイギリスの大学を模範として作成されていたため、中国語がカリキュラム上の学習内容として十分に位置づけられていたとは言い難い状況であった。また、欧米の教育しか受けていない外国人教員たちは、中国の教会大学で授業を展開する時、中国の国学^{注 8)}に豊富な知識を持っていなかったため、国学を教えるのが非常に困難であった。つまり、華東地区の教会大学のカリキュラムでは、国語学習が軽視されていたといえよう。

では、中国でもっとも早く大学の課程を設立したセント・ジョンズのカリキュラムを確認していく。セント・ジョンズは、1892 年に改革され、三年制の正館（総合学科）、二年制の圣教書館（神学科）、三年制の医学館（医学科）を設立した（徐，2009，p. 17）。

表 1-2. 正館のカリキュラムの概要

分類	第 1 年	第 2 年	第 3 年
英文（英語）	暇書，英文史記，富 国学，近世史記，形 学一半，代数下半， 作文	暇書，英文史記，辨 理法，活物学，昆虫 学，形学全，作文	傳 奇 二 本， 万 国 公 法， 心 靈 学， 八 線 学， 園 曲 線
華文（中国語）	天道遡源，温四書五 経，作文，格物，光 学，電学，天文	天道遡源，温四書五 経，作文，化学鑑原， 天文	分辨各教優劣，化学 鑑原，石学，作文

(セント・ジョーンズ書院詳細章程，1892，p. 3) より作成

この正館のカリキュラムを見ると，半分以上の講義が英語で行われていたことが読み取れる．1895 年にセント・ジョーンズ正館で初めて 3 名の学生が卒業した．同年に，中国の清朝は日中戦争に敗れ，様々な人材を育成する必要があったため，教育制度などが大きく変わった（徐，2009，p. 18）．セント・ジョーンズも校長のト舩斎（中国名）ポット（F. L. Hawks Pott）^{注 7}はこの教育改革の機運に乗じて，1896 年に 2 回目の大きな改革をした．それは，アメリカの聖公会布道部によって，セント・ジョーンズの大学部の課程と学科が変わり，四年制の備館，三年制の広学館（元正館），四年制の医学館，三年制の聖教館が設置されたことである（徐，2009，p. 18）．広学館，医学館と聖教館の課程は，以下の表に示した通りである．

表 1-3. 広学館のカリキュラムの概要

分類	第 1 年	第 2 年	第 3 年
英文（英語）	史記第十九週， 格致化学推原，算法 代数下半，形学第一 卷，富国策，雜著一 本，作文	辨理法，熱血電学， 科学鑑原，地学，形 学完，雜著一本，十 九週史記完，作文	雜詩一本，天文，植 物学，性靈学，圓錐 曲線及八線学，欧州 律例史記，作文
華文（中国語）	温書，史記，作文	温書，史記，作文	温書，史記，作文
教書	新約書信	基督道証拠	各教比較

(セント・ジョンズ書院詳細章程，1892，p. 3) より作成

表 1-4. 医学館のカリキュラムの概要

分類	第 1 年	第 2 年	第 3 年	第 4 年
英文（英語）	全体闡微，身 理学，化学育 物，对症施薬	全体闡微，身理学，化 学，对症施薬，化学推 原，各致，定症見驗， 以顕微鏡察各症，絡 血及諸質学	和薬定法，精 理薬性，児童 症，皮膚症，耳 目鼻喉諸症 学，外科秘授	驗薬方法，刀 圭方法，皮膚 症，児童症
教書	新約書信	基督道証拠	各教比較	

(セント・ジョンズ書院詳細章程，1892，p. 3) より作成

表 1-5. 圣教館のカリキュラムの概要

第 1 年	第 2 年	第 3 年
新約四福音書，使徒信經，教 会史記，傳道要義，講道紀略， 旧約史記	新約書信，教会史記，福音 之道大略，講道紀略，旧約 先知書，尼吉亜信經	禱文註解，教会綱例，新約書 信，教会史記，講道紀略，傳 道要義

(セント・ジョンズ書院詳細章程，1892，p. 3) より作成

以上の課程から見ると、セント・ジョンズの学科はより詳細な分類がなされていたことが読み取れる。英語の授業が多く、特に聖教館においてはすべての授業が英語で行われた。欧米文化がそれらの英語の授業から伝播してきたことが推察される。

1905 年、セント・ジョンズはアメリカで正式に大学として登記を行い、大学として認定された。多くの教員はアメリカから来ており、アメリカの教育システムを用いて授業が行われた（徐，2009，p. 20）。当時のアメリカの教育は「徳・知・体・美」の全面教育を主張しており、学生の全面教育はサークル活動に託し、音楽、演劇はもちろん、スポーツをするサークルが多数設立された（朗，2006，p. 59）。また、セント・ジョンズは中国のスポーツの先駆けとして位置づけられる。なぜなら、1890 年 5 月 20 日に中国で初めて陸上競技が行われたといわれているからである（セント・ジョンズ大学五十年史略出版委員会，1972，p. 9）。そして、華東地区の教会大学がセント・ジョンズに学んで、普通の課程で学ぶだけではなく、様々なサークルが設立し、非常にスポーツを受け入れやすい環境が整えられていた。

第 3 節：本章の総括

本章では、華東地区における教会学校の成立過程と教会大学の教員および学生の出自とカリキュラムの概要の検討を通して、華東地区における教会大学の位置づけを明らかにすることを目的とした。

第 1 節では、1870 年以降、教会における中等教育制度の確立が始まり、プロテスタント系の教会学校が多く設立されたことが確認できた。また、当時の中国においてスポーツがもっとも盛んに行われていた場所は、華東地区の教会大学であったが、教会大学の目的は、スポーツ選手を養成することではなく、宣教であった。しかし、多くの学校にはスター選手がいたため、新聞、雑誌などのメディアに取り上げられる機会があり、教会大学の関心と支援が得られたことが明らかになった。

第 2 節では、教会大学で活躍し、宣教のために欧米から来た教員および教会大学全体の学生の出自と欧米化したカリキュラムの概要を明らかにした。具体的には、教会大学の中に外国人教員がいるわけではなく、多数の中国人教員もいた。また、セント・ジョンズを例として、教会大学は国語課程を軽視しており、カリキュラムが欧米化している傾向があったことについて明らかになった。最後に、華東地区の教会大学が普通の課程で学ぶだけでなく、様々なサークルが設立し、非常にスポーツが受け入れやすい環境が作られていたことが明らかになった。

第 1 章 注釈

注 1) 阿片戦争 (First Opium War) は、1840 年から 2 年間にわたって中国の清朝とイギリスとの間の戦争。この戦争は、麻薬である阿片が原因となったため、阿片戦争と呼ばれている。約 2 年続いた阿片戦争は、イギリスの勝利で終わり 1842 年、清朝は南京条約を結ばされた。阿片戦争の結果、1842 年、南京でイギリス・清朝の間に締結された不平等条約である。江寧条約ともいう。清朝はイギリスに対し、香港割譲のほか、広州、福州、厦門、寧波、上海の開港、公行の廃止、賠償金の支払等を約した。

注 2) 南京条約とは、1842 年に阿片戦争を終結させるため、南京近くの長江上に停泊したイギリス海軍戦列艦コーンウォリス艦上で、中国の清朝とイギリスの間で結ばれた講和条約である。具体的な内容は 5 つがあり、「香港島割譲」、「賠償金 2,100 万ドルを 4 年分割で支払う」、「広州、福州、厦門、寧波、上海の 5 港開港」、「公行の廃止による貿易完全自由化」である。

注 3) 中国の開国とは、阿片戦争 (1840－1842 年) の敗北により、対外的に鎖国をつづけていた封建中国が、欧米の資本主義各国に近代的な国交、通商関係を強いられ、不平等条約の締結を起点として外国と交通や貿易を始めること。

注 4) 洋務運動とは、1860－1890 年代ごろ、ヨーロッパの科学技術を導入して、国力の増強を目指し、高級官僚であった曾国藩、李鴻章、張之洞などが推進した自強運動である。

注 5) 租界とは、1840 年代以降、西欧列強の不平等条約により中国大陸各地の開港場に設けられ、それらの開港場において、一定の地域を租借した外国が行政、警察権などを独自行使する地域のことである。

注 6) 国学とは、当時の学者らは、西洋に対抗し得るものとして中国独自の伝統文化を探究し、これを「国学」と名付けた。中国の学問とは「国学」であり、西洋の学問は「西学」である。

注 7) 科挙制度とは、隋唐の時代の 598 年に制定され、清朝末期の 1905 年において、古典の教養、特に文学の才能や学力を試す問題や学術論文が重視され、官吏採用のための中国の特殊な資格試験制度である。

注 8) ト舩斎（中国名）ポット（F. L. H. Pott）は、アメリカのコロンビア大学（当時コロンビアカレッジ）卒、1888 年、24 才からセント・ジョンズの第 2 代校長に就任し、1941 年まで校長を務めた。

第 1 章 引用・参考文献

- 芳衛廉（2005）基督教高等教育在变革中的中国 1880—1950. 劉家峰訳，珠海：珠海出版社.
- F.L.H.Pott（1905）Report of St. John's College Shanghai 1904—1905, Q243—1—1446—1, p. 76.
- 顧長生（1991）宣教士与近代中国. 上海：上海人民教育出版社.
- 顧長生（2004）宣教士与近代中国（増補本）. 上海：上海人民教育出版社.
- 何曉夏，史静寰（1996）教会学校与中国教育近代史. 広東：広東教育出版社.
- 黄新憲（1996）基督教教育与中国社会变迁（吳梓明編）. 基督教教育与中国社会従書（第三輯），福建：福建教育出版社.
- 杰西・格・盧茨（1988）中国教会大学史（1850—1950）. 曾鉅生訳，杭州：浙江教育出版社.
- 朗浄（2006）近代体育在上海. 上海：上海科学院出版社.
- 雷孜知（Michael C.Lazich）（2006）千禧年の感召—美國第一位來華新教傳教士裨治文.
- 劉建輝（2005）近代中国におけるプロテスタント宣教師の文化活動：上海・墨海書館を中心に. 日本研究：国際日本文化研究センター紀要，30：pp. 295—304.
- セント・ジョンズ大学五十年史略出版委員会（1972）セント・ジョンズ大学五十年史略 1879—1929，台北：台湾セント・ジョンズ大学同学会.
- セント・ジョンズ書院詳細章程（1892）上海：上海美華書館.
- 史静寰（1999）狄考文与司徒雷登—西方新教傳教士在华教育活動. 広東：珠海出版社，pp. 55—56.
- 史静寰，王立新（1998）基督教教育与中国知識分子（吳梓明編）. 基督教教育与中国社会従書（第二輯），福建：福建教育出版社.
- 孫邦華（2004）教会大学在中国：輔仁大学. 章開沅主編，石家庄：河北教育出版社.
- 譚雙泉（1995）教会大学在近現代中国. 長沙：湖南教育出版社.
- 王炳照等著（1994）中国近代教育史. 台北：五南圖書公司.
- 王国平（2000）東吳大学の創辦. 蘇州大学学报，4（2）：pp. 97—106.
- 熊明安（1988）中国高等教育史. 重慶：重慶出版社.
- 熊月之，周武（2007）“東方的哈佛”—セント・ジョンズ大学管論. 社会科学，5：pp147—

163.

徐以驊（1999）教育与宗教：作為宣教媒介的セント・ジョーンズ大学．珠海：珠海出版社，
p. 1.

徐以驊（2009）上海セント・ジョーンズ大学（1879－1952）上海セント・ジョーンズ大学校史
編輯員会主編，上海：上海人民出版社．

中華統行委辨会調査特委会（2007）1901－1920 年中国基督教調査資料（修訂）．蔡詠春等
訳，北京：中国社会科学出版社．

第 2 章：華東地区におけるスポーツの導入および国内外競技会への出場

第 1 章において、清朝末期から中華民国初期までの華東地区における教会学校の設立過程、教会学校の教員および生徒の出自とカリキュラムの概要を明らかにした。華東地区の教会大学には、様々なサークルが設立されており、非常にスポーツを受け入れやすい環境が整えられていたことを明らかにした。

本章では、華東地区におけるスポーツの導入過程と華東地区の大学生の国際競技会への出場状況を明らかにすることを目的とする。

第1節：華東地区におけるスポーツの導入

本節において、取り上げるスポーツの種目は1914年5月、東呉大学の提案に基づき、結成した「東華六大学体育連合運動会」^{注1)}の競技種目であった陸上競技、野球、サッカー、バスケットボールとテニスとした。

開国時の中国において、スポーツは学校から普及していった。そのため、本節ではスポーツが、外国人の宣教師、教会大学、在留外国人、YMCAの宣教師などによって中国へ導入されたことをそれぞれ検討していく。

第1項：外国人の宣教師による陸上競技の導入

19世紀末、洋務派^{注2)}は当時の天津市を主な拠点とし、工業の近代化を推進するとともに、中国の各地に30カ所あまりの新式の軍関係の学校が相次いで設立された(李, 2015)。そして、洋務派の設立した軍関係の学校である北洋水師学堂、天津武備学堂、京師同文館などでは陸上競技が行われていた。成都体育学院体育史研究室(1981)によると、1894年以前の教会学校および上記軍関係の学校における体育授業の様子について、以下のように述べられている。

「1894年以前の体育課の中に、北洋水師学堂ではハードル、幅跳び、高跳びなどの陸上競技の種目があり、スプーンレース、二人三脚などの競技も行われていた。同じ時期に、いくつかの教会学校でも陸上競技を実施していた。また、20世紀の初めになると、洋務運動で設立された新式学校において、陸上競技が多く行われるようになった。」

(成都体育学院体育史研究室, 1981, pp. 53-54)

この記述から、1890年代から20世紀の始めにかけて、陸上競技体育授業としては限られていた軍関係学校から、教会学校までに広がっていたことがわかる。そして、スポーツとしての陸上競技が中国に導入されたのは、教会学校のアメリカ人教員の李藹門(Samuel. E. Smalley)によってであった(セント・ジョーンズ大学五十年史略出版委員会, 1972, p. 9)。

1890年5月20日に上海のセント・ジョンズにおいて、李藹門先生の尽力により、学校で陸上競技会が組織され、学内の礼拝堂の前の広場で举行された。しがしながら、当時こうした行為（陸上競技）をあまり品の良いものでないとする人がいたため、中国人学生は保守的で眺めているだけであったが、その年から毎年2回（春・秋）、セント・ジョンズ全校の陸上競技会を開催していた（セント・ジョンズ大学五十年史略出版委員会、1972, p. 9）。このことからして陸上競技が中国へ導入されたのは1890年頃であったと推察される。

セント・ジョンズでは、1890年から毎年2回（春・秋）、陸上競技会を開催していたが、中国の他の多くの学校に、このような競技会が定着し普及するまでには時間がかかった。1895年、アメリカのハワイから、華僑学生がセント・ジョンズに転校し、彼らは陸上競技に非常に熱心を持ち、それにつられて現地の学生も陸上競技を行うようになり、陸上競技の普及に貢献したという（Mary, 1955, p. 162）。また、1897年に創設された南洋では、学校が設立されると同時に、アメリカから赴任した福開森（中国名）・フォーガソン（John Calvin Ferguson）が陸上競技、野球、サッカー、テニス、軍事訓練などを導入し、学生が自由に陸上競技を練習していた。そして、1899年の冬に南洋で最初の陸上競技の運動会を開催していた（交通大学校史撰写組編、1986, p. 13）。そのあと、中国の各地で陸上競技の運動会が開催されるようになったことから、中国において徐々に陸上競技が定着していったと考えられる。

以上のことから、スポーツとしての陸上競技が中国へ導入されたのは、1890年に教会学校のアメリカ人の李藹門教員によってであったことが確認された。さらに、陸上競技の導入と定着の受け皿として、セント・ジョンズと南洋が重要な役割を果たしていた。

第2項：教会大学による野球の導入

1856－1860年の第2次阿片戦争（アロー戦争とも称される）によって、中国の清朝政府は、西洋諸国と「南京条約」、「天津条約」、「北京条約」など、清朝にとって不平等な条約が締結された。清朝政府はイギリスとフランスなどの西欧先進国の軍事技術の先進性を認識し、清朝の高級官僚であった曾国藩、李鴻章、左宗棠、張之洞らは「師夷長技以自強」というスローガンを掲げ、西洋諸国の先進技術の導入を通じて、清朝の強大化を追求する

「洋務運動」を展開した（横井ほか，2017）．そして，清朝は中国の近代化を目指し，欧米諸国に多数の留学生を派遣した．具体的には，1872 年，清朝政府による最初の組織的な海外への留学生派遣として，30 人の児童を国費留学生として，アメリカへ送った．また，清朝政府は，当時の上海，寧波，広東という裕福な地域において，12 歳から 16 歳までの少年を選び，毎年 30 人ずつ 4 年間にわたり出国させ，1875 年までに合計 120 人をアメリカへ送り出した（容，1969，p. 170－183）．このように，アメリカに滞在した留学生たちは，野球に出会い，実際にプレイするようになっていった．

では，野球が中国へ導入されたのはいつだったのだろうか．この点についえ，笹島（1987）は，以下のように述べている．

「留学生はアメリカ在留中に野球を好み中華棒球隊（中国野球チーム）を組織している．マサチューセッツ州スプリングフィールドに中国留学生管理委員会が設けられ留学生を収容する宿舍（寮）もあったので，そこに野球チームがつくられたのではないだろうか．・・・（中略）・・・光緒 13 年（1887 年）に中国チームはサンフランシスコ最強の橡地（シャンディ）チームを負けて帰国した（同治 15 年の留学生ならば同治 11 年出国の留学生）．これが中国への野球の導入である．」（笹島，1987，p. 122）

中国チームが負けて帰国したことによって，中国に野球が導入されたという判断については，疑問の余地がある．実際には，帰国した中国チームは野球をすることがほとんどなく，1890 年代にアメリカ海軍の水兵と 1 回試合をただけであった（Hui-chi'ng Yen, 1974, p. 7）．

中国への野球の導入については，2 つの通説がある．まず，1895 年に北京の匯文書院でアメリカ留学生の曹泳帰を医師として雇って，ボランティアとして彼に野球の指導をしてもらった．そして，北京の匯文書院で最初の野球チームが作られると，北通州の協和書院，北京の清華学校，天津の南開学校，新学書院でも野球を行うようになった（陳ほか，1990，p. 8；陳，1991，pp. 21－25；崔，1998，p. 227）．さらに，前項で述べた通り，同年，アメリカのハワイから華僑学生がセント・ジョーンズに転校し，彼らは陸上競技に非常に熱心に取り組んでいた．そんな彼らによって，野球もセント・ジョーンズで伝えられ，1907 年に同じく教会学校の通州の協和書院と野球の試合が行われたという（Mary, 1955, p. 162）．

しかし、高嶋（2015）によって、1907年よりも前の1891年に、セント・ジョンズとイギリスのパブリック・スクールとの野球の試合が行われたことが指摘されている。その様子は、以下の通りである。

「セント・ジョンズは1891年6月6日にパブリック・スクール（工部局西童男校）と野球の試合をして23対38で破れたが、これは「我々がイギリスの少年とおこなった最初の試合」であった。または、1895年までセント・ジョンズに在学した Hui-ch'ing Yen（顔恵慶）はセント・ジョンズの学生はグローブもその他の防具も一切なしで、自家製のバールと即席のバットを使って、原始的な野球のようなものをしていたと語っていた。」（高嶋，2015，p. 312）

このことから、中国では上海のセント・ジョンズとイギリスの工部局西童男校が中国におけるもっとも早い野球の試合であったと考えられる。

そのあと、1913年から1914年に北京三角体育連合会（匯文書院，協和書院，清華学校）が野球のリーグ戦を行っているが、2年間しか実施されなかった。一方、華東地区ではセント・ジョンズ，之江大学，滬江大学などの教会学校が所属している「東華六大学体育連合運動会」が1915年に開催した競技会において、野球が正式種目として採用された（黎，1984，p. 11－35）。ここから、華東地区において野球が定着してきたことが読み取れるだろう。

しかし、当時は、特別な球具，服が必要であり，ゲームを成立させるための人数を集めることが難しかったため，野球の競技人口はそれほど多くなかった。そのため，野球は，第2回から第6回の全国運動会，正式項目として，採用されたものの，地区対抗であった第2回（1914年），第3回（1924年）に出場したのは華東，華北の2地区のみであった（呉，1981，pp. 79－81，91）。また，省，特別市が出場単位となった第4回（1930年）では，6チーム（参加地域22），第5回（1931年）では，7チーム（参加地域30），第6回（1935年）では，5チーム（参加地域38）が出場した（呉，1981，pp. 133－134）。そして，第7回（1948年）では正式種目から外され，公開競技となってしまった（呉，1981，pp. 213－227）。

以上から，1891年に上海のセント・ジョンズとイギリスの工部局西童男校とが，中国において最初期となる野球の試合を行ったことが確認できた。また，「東華六大学体育連合運

動会」が1915年に開催した競技会において、野球が正式種目として採用され、定期的に試合が開催されたことによって、徐々に野球が華東地区に定着していった。しかし、全国運動会の競技種目は、第1回の4種目から第7回の男子12種目、女子9種目と回を追って、種目数が増加していつているにもかかわらず、野球は、第7回全国運動会で、正式種目から外れた。ここから、中国では、野球が導入され、定着はしたものの、全国的に広く普及していなかったことが推察される。

第3項：在留外国人によるサッカーの導入

FIFA のホームページでは「最も古い形態のサッカーとして中国の蹴鞠」を載せている（FIFA, <http://www.fifa.com/about-fifa/who-we-are/the-game/index.html>）。2014年6月10日、ブラジルで開催された第20回目のFIFAワールドカップの開幕を目前に控え、国際サッカー連盟（FIFA）のゼップ・ブラッター会長が、中国が「サッカー（蹴鞠）の発祥地」であるとする認定証を送った（法制晩報、2014年06月10日付）。しかし、FIFAの決定に対して、イギリスの専門家は強く批判した。古代のサッカー（蹴鞠）と現在のサッカーではルールが異なっており、古代中国で行われた蹴鞠とサッカーとの繋がりほとんど見られない。したがって、以下では、イギリスで発祥した現代のサッカーが中国に導入されていく過程について検討していく。

サッカーが中国に導入された過程については、いくつかの説がある。笹島（1987）は、サッカーが中国へ導入される経緯について、以下のように述べている。

「阿片戦争に敗れた中国は香港をイギリスに割譲し、上海を開港場とした。上海に在留するイギリス人がグラウンドを作り、彼らの国技であるサッカーを始めた。

咸豊6年（1856年）のアロー号事件により、義和団の乱で敗れた清朝は咸豊10年（1860年）に天津条約を締結した。その条約により、上海の税関長にイギリス人が就任することになった。同治2年（1863年）にイギリス人のヘンダーソンが税関町長として着任した。また、同じ頃英米煙草会社も設立された。数年後に税関、煙草会社、役所、企業の外国人、イギリス海軍などにチームができてサッカーをやるようになった。これは中国人がサッカーに接した最初である。

在留外国人のサッカーに接したことによって、中国人もサッカーをやるようになっていったのである。

光緒 23 年（1897 年）に香港で特別銀牌のサッカー大会が行われたが、その時には上海、南京、北京などの大都市にはサッカーチームが組織されていた。その後、彼らを通じて各地にサッカーが広がっていった。

サッカーの導入は 1870 年代である、それが徐々にではあるが定着していったのは 1890 年代ではないかと考えられる。」（笹島，1987，pp. 118－119）

つまり、笹島（1987）は、1860 年代から 1870 年代の間に香港に在留していたイギリス人がサッカーを行っていたことによって、中国人もサッカーをプレイするようになっていったという主張をしていることが読み取れる。

一方、崔（1998）、羅ほか（2008）は、サッカーが中国に導入された経緯をより詳細に明らかにしている。崔（1998）、羅ほか（2008）によると、1880 年代から 1890 年代にかけて、当時イギリスの植民地であった香港島の快樂村の官立小学校でイギリス人がサッカーをやっている姿を見ていたという（崔，1998，p. 209；羅ほか，2008，p. 346）。したがって、サッカーが導入された時期は、1880 年代以降であると主張している。

ほかにも、1895 年にアメリカのハワイから華僑学生がセント・ジョーンズに転校したことによって、他の学生たちも陸上競技だけでなく、サッカーも競技種目としてプレイしており、翌年度にサッカーチームを設立し、校内でゲームも行われていたという（Mary, 1955, p. 162）。これらのことから、華東地区においてサッカーが定着したことが読み取れるだろう。

以上のことから、サッカーが中国への導入については、確実な資料が見つからず、断定することは難しいが、少なくとも 1890 年代頃には、華東地区の教会大学においてプレイされていたことが確認された。

サッカーは、義和団の乱^{注3)}の直後の 1901 年に各国の外国公館の間で試合が行われるようになった。また、当時の上海には多くの外国人が在留しており、サッカーの試合が多く行われていたが、中国人チームは招待されることがなかったため、参加することがほとんどなく、わずかに友好試合にセント・ジョーンズが参加していたにすぎなかった。中国人同士の最初期のサッカーの試合は、1902 11 月 16 日のセント・ジョーンズと中西書院（教会学校）との対戦であり、4 対 1 でセント・ジョーンズが勝利を収めた。

この後、1903 年から、セント・ジョンズと南洋の 2 校の間で、サッカーの定期戦が行われるようになった。1903 年と 1904 年に開かれた定期戦では、セント・ジョンズが勝利した。南洋は、この 2 度の敗北をきっかけとして、サッカー部を創設した（上海交通大学校史編纂委員会編，2006，p. 70）。両校の定期戦は「東華六大学体育運動会」を経て、第 3 章で論じる 1925 年の五・三〇事件まで続いていた。この 2 校の対戦は日本の早慶戦のように、スポーツを通して、卒業生と在校生とを結びつけたり、学生と教員の愛校心を高めたりした。

第 4 項：YMCA の宣教師によるバスケットボールの導入

バスケットボールが中国へ導入された経緯については、笹島（1987）が以下のように述べている。

「バスケットボールの中国への導入については定かではない。中国へのバスケットボールの導入についてはもっとも早いものでは光緒 18 年（1892 年）としており、遅いものでは宣統元年（1909 年）としている。

中華民国共和国では光緒 22 年（1896 年）から光緒 24 年（1898 年）の間に天津、北京の YMCA を経由して中国に導入されたとしている。「中国史料第五輯」では 1891 年にアメリカで考案されたバスケットボールは清朝の末年に中国に伝えられたとしている。

光緒 18 年（1892 年）というのはネイスミスによってバスケットボールが考案された翌年であり未だルールも流動的であった時代なので、中国に導入されたことは考えがたい。

光緒 22 年（1896 年）から光緒 24 年（1898 年）の間に天津・北京の YMCA を経由して中国に伝えられたという中華人民共和国の説も、天津 YMCA の創立が光緒 29 年（1903 年）であることからして信じがたい。同様にネイスミスの回想録にある光緒 24 年（1898 年）というものの誤りか、ネイスミスの記憶違いということになるであろう。」（笹島，1987，p. 119－120）

これは 30 年前の論稿なので、当時はバスケットボールが中国への導入について、いくつかの説があるが、現在ははっきりとわかっている。中国においては、もっとも早い記録とされるは 1895 年 12 月 08 日、天津東馬路 94 号にある天津 YMCA のビルの中に、アメリカの来会理（中国名）ライアン（D. Willard Lyon）とアメリカ人の幹事たちで中国の最初のバスケットボール試合が行われた。この試合は YMCA で宣教師の講演の後で行い、スポーツの模範演技として披露した（毎日頭条, <https://kknews.cc/sports/m32rjnp.html>）。YMCA の影響で、北洋水師学堂、電報学堂、武備学堂など天津の軍関係の学校が相次ぎ、バスケットボールを行なうようになった。まだ、清朝末期なので、学生たちは長い髪の毛を頭に編み、中式長衣を着て、チームメンバー5 人の協力で、10 フィートの高さのゴールに、ボールを投げ合っていた（李ほか, 1991, pp. 8-9）。つまり、1891 年に、アメリカ・マサチューセッツ州スプリングフィールドの国際 YMCA トレーニングスクール（現・スプリングフィールド・カレッジ）の体育部教官を務めていたカナダ人のジェームズ・ネイスミス（James Naismith）によって、新しく考案されたスポーツが、4 年も立たずに中国に紹介されたのである。当時は競技として行うスポーツではなく、ただの遊戯だと考えられていた。

そして、1896 年 03 月 28 日、天津で中国バスケットボール史上の初の正式試合が行われた（李ほか, 1991, pp. 8-9）。その後の数年間、天津 YMCA が天津学堂連合運動会、天津城市校際体育運動会、天津年度運動会を主催し、バスケットボールが主な種目として、注目を浴びた。参加した学校の多くは洋務運動で設立した学校であった。

バスケットボールが、大学において急速に人気のゲームとなりつつあったものの、1910 年 10 月の第 1 回全国運動会の正式種目としては採用されなかった。正式種目ではなかったが、華北（北京・天津）、上海、呉寧（蘇州・南京）の 3 つのチームによる公開試合は行われていた。この公開試合では、北京と天津の合同チームである華北チームが優勝した（李ほか, 1991, p. 12）。

続いて 1912 年になると、バスケットボールは、北京、天津の学校に広く普及し、匯文書院、協和書院、清華学校の間でリーグ戦が行われるようになったばかりでなく、天津の南開学校、新学書院（教会学校）や公立の学校でもバスケットボールをやるようになった。その後、バスケットボールは、全国各地に展開され、1923 年の第 3 回全国運動会では、正式種目として採用された。

最後に、2015 年 12 月 08 日、アメリカの NBA のヒューストン・ロケッツで活躍した姚

明（2017年2月23日，中国バスケットボール協会の新会長に就任）（Recordchina, <http://www.recordchina.co.jp/b166836-s0-c50.html>），中国人初のWNBA選手鄭海霞など中国バスケットボール界の有力者が天津体育学院にて，バスケットボールが中国への導入について，120年の記念フォーラムが行われた（Weibo, <https://www.weibo.com/p/1001603917904331600579>）。

以上のことから，バスケットボールが1895年12月08日，天津YMCAのライアンより導入され，翌年度，正式な試合が行なわれ，中国に定着したことが確認できた。

華東地区においては，1908年頃，宣教のためにアメリカから来たYMCA体育主事であるエクスナー(Max J. Exner)が上海でバスケットボールの普及に努力した(高嶋, 2015)。また，前述したように，バスケットボールが，大学において急速に人気競技となりつつあったものの，1910年10月の第1回全国運動会の正式種目としては採用されなかったが，華北（北京・天津），上海，吳寧（蘇州・南京）の3つのチームによる公開試合は行われていた。つまり，1910年頃，華東地区における上海，蘇州，南京などでは，すでに，広い範囲で，バスケットボールが行われていたのであった。さらに，セント・ジョンズ・エコーによると，辛亥革命の勃発により，国情が不安定であるにもかかわらず，セント・ジョンズの学内活動が通常に行われ，特にバスケットボールが大学で人気になりつつあり，クラスの間で試合が行われたという（T. W. Sung, 1912）。最後に，1917年春になると，バスケットボールは，1914年に設立された「東華六大学体育連合運動会」に正式な種目として採用された（V. K. Yang, 1917）。以上より，華東地区においてバスケットボールが大学競技スポーツの一貫として，定期的に行われるようになったことが明らかになった。

第5項：外国人の宣教師と教員によるテニスの導入

前述したように，当時の中国は多数の不平等条約下にあり，外国人は租界がおいている沿岸各地に居住するようになったため，外国人同士で早くからテニスの楽しさを味わっていたが，どの時期から中国人もやれるようになったのが，まだはっきりわかっていない。テニス中国への導入について，いくつかの説があり，崔（1998），羅ほか（2008）は1885前後に，北京の匯文書院，通州の協和書院，上海のセント・ジョンズなどでテニスが始まった（崔，1988, p. 209；羅ほか，2008, p. 346）と述べている。つまり，最初に，テ

ニスをやったのは、いずれも教会学校の学生と言われている。すなわち、テニスは教会学校の外国人の宣教師、教員などによって、学生が指導され、やれるようになったことが推測できる。

そして、華東地区におけるテニスの導入について、もっとも早く記録は 1892 年にセント・ジョンズの学生が毎日の午後からテニスの練習が行っていることである。このほか「中華大学体育連合会」主催のテニス大会が、1907 年から始まっているが、1909 年が最後の大会となったため、3 回しか開催されなかった（高嶋，2015）。

さらに、1910 年からの第 1 回全国運動会はテニスが正式な種目として、採用されたが、第 1 回全国運動会が企画・運営しているため、テニスが適当に決定された種目かもしれない（笹島，1987，p. 118）。当時の全国運動会に出場している選手は大半が教会学校の学生と中国に在住している華僑であったから、テニスが中国での展開にこれらの学生と華僑が役に立っただろう。

第2節：華東地区の大学生の国際競技会への出場

第1節においては、中国へのスポーツの導入の経緯を明らかにした。そこでは、阿片戦争後に開国して40余年を経過してから、スポーツが宣教師、教会大学、在留外国人、YMCAの宣教師などによって、中国に導入され、教会学校を中心として普及していったことが明らかとなった。

本節では、華東地区の大学生の国際競技会への出場状況について検討していく。具体的には、極東選手権競技大会と1936年ベルリン・オリンピック大会への出場状況についてみていく。

第1項：極東選手権競技大会への出場

周知のように、極東選手権競技大会は1910年にフィリピン在住のアメリカ人E.S.ブラウンにより提唱され、1913年に第1回大会がマニラで行われ、第1回から第8回までは2年おき、第9回は3年おき、第10回からは4年おきに行われた。第1回は「東洋オリンピック」という名称であったが、第2回以降「極東選手権競技大会」に改称された。中国は第1回から参加していた。第8回までの参加国は日本・中国・フィリピンで、第9回から蘭印（現在のインドネシア）が加わった。

第10回大会において満州国の極東選手権競技大会参加問題をめぐって、物議をかもし、憲章改正問題に関して、満洲国を極東大会に参加させようとした日本と、中国とが対立し、最後の定時総会で中国側委員の退場とともに日本とフィリピンの意見が一致し、従来の極東体育協会ならびに極東選手権競技大会は解消され、新たに東洋体育協会ならびにその主催の東洋選手権競技会を開催することが決定した。そして、東洋諸国のスポーツ界に大きな影響を与え、1913年にマニラで始まった極東選手権競技大会も開始以来21年でその幕を閉じた。

1913年から1934年にかけて、10回の大会が開催し、競技種目は、陸上競技、サッカー、バスケットボール、バレーボール、水泳、野球、テニス、自転車、ボクシングがあり、陸上競技をトラックとフィールドに分けて、種目ごとの優勝を決め、優勝種目の多い国を総合優勝としていた（表2-1）。

表 2-1. 極東選手権競技大会の開催場所、時間および中国の成績

回数	開催（年，月，日）	中国の順位	中国の優勝種目	主催地
1	1913.05.01－05.06	2 位	なし	マニラ
2	1915.05.15－05.22	優勝	トラック，フィールド，水泳， サッカー，バレーボール	上海
3	1917.05.08－05.12	3 位	サッカー，バレーボール	東京
4	1919.05.12－05.17	2 位	サッカー	マニラ
5	1921.05.30－06.04	2 位	サッカー，バスケットボール， バレーボール	上海
6	1923.05.16.05.26	3 位	サッカー	大阪
7	1925.05.16－05.22	2 位	サッカー	マニラ
8	1927.08.27－09.05	2 位	サッカー，バレーボール	上海
9	1930.05.24－05.31	2 位	サッカー，バレーボール	東京
10	1934.05.12－05.19	制度廃止	サッカー	マニラ

（笹島，1987，pp. 157－158）をもとに筆者が作成

中国は、極東選手権競技大会で1度だけ優勝した。これは中国の代表選手が初めて、国際大会で活躍したことであったといえよう。中国を代表し、極東選手権競技大会に参加した選手はほとんどが当時の大学生であった。第1回極東選手権競技大会に参加した36名の中国選手は、すべて高等教育機関とYMCAに所属していた。それらの内訳は、華北地区では北京の清華学校、北京大学の9名、華東地区では南京の金陵大学と上海の南洋、セント・ジョーンズ、上海YMCAの9名、華南地区では広州の南武学校、広州YMCA、香港大学と香港南華の18名であった。つまり、当時スポーツがもっとも盛んに行われていた教会学校とYMCAから代表選手が輩出されていた。また、1913年の第1回極東選手権競技大会では、中国代表が3人4種目で優勝した。広東の南武学堂の陳彦が高跳びで、上海セント・ジョーンズの韋煥章が高跳びと110mハードルで、上海セント・ジョーンズから清華学校に転校した潘文炳が10種目で優勝した（Gbrathletics，<http://www.gbrathletics.com/ic/fec.htm>）。つまり、華東地区の大学生の数は4分の1しか

占められてないが、第1回の極東選手権競技大会で優勝選手を輩出していたことが明らかになった。

第2項：1936年ベルリン・オリンピック大会への出場

オリンピック大会は1896年にギリシャのアテネで第1回が行われたが、オリンピック大会への参加国も徐々に増加し、もっとも重要なスポーツの国際大会の1つとなっている。中国は、1921年に国際大会である極東選手権競技大会を主催し、また、1922年ごろに、IOCに加盟した。1932年第10回ロサンゼルス大会において、劉長春が中国代表選手として初めてオリンピック大会へ出場した。さらに、1928年アムステルダム・オリンピック大会には、試合に出場する選手はいなかったが、中国政府の代表として、当時中華全国体育協進会^{注4)}の名誉幹事であった宋如海^{注5)}が会場に赴き視察した。

1932年のロサンゼルス・オリンピック大会には、69名の選手、26名の役員（表2-2）と37名の視察員を派遣し、陸上競技・サッカー・バスケットボール・水泳・自転車・ボクシング、ウエイトリフティングなどの種目に出場した。

表2-2. 中国（中華民国）代表団26名の役員

名前	職務	性別	年齢	出身地
王正廷	総領隊	男	55	浙江奉化
沈嗣良	総幹事	男	41	浙江寧波
郝更生	体育考察団総領隊	男	36	江蘇淮安
柯德 (Fred Cordt)	ドイツ顧問	男	35	ドイツ
黄維立	駐ドイツ代表	男	26	湖南湘潭
宋如海	駐ドイツ代表助理	男	45	湖北漢口
周家騏	幹事	男	35	浙江海寧
施肇康	幹事兼會計	男	32	浙江寧波
余衡之	助理幹事	男	43	広東中山

黄元愷	通訳	男	33	広東
梅馥香	通訳	女	23	ドイツ
施正信	駐ドイツ医者	男	28	浙江寧波
馬約翰	総監督兼陸上競技チーム監督	男	47	福建廈門
容啓兆	サッカーチーム主任	男	39	広東中山
顔成坤	監督	男	なし	広東
黄家駿	管理	男	36	広東中山
董守義	バスケットボールチーム監督	男	40	河北蠡県
李清安	管理	男	33	河北武清
宋君復	陸上競技チーム管理	男	39	浙江紹興
沈昆南	助理	男	35	福建廈門
葉良	ウエイトリフティングチーム管理	男	33	江蘇嘉定
郝銘	國術のエキシビションチーム管理	男	41	浙江
顧舜華	國術のエキシビションチーム管理	男	38	江蘇崇明
舒鴻	トレーナー	男	41	浙江
陸翔千	トレーナー	男	34	江蘇無錫
江良規	トレーナー	男	25	浙江奉化

(中華全国体育協進会編, 1937, pp. 35-45) より筆者が作成

このように、多数の選手がオリンピック大会に出場したが、メダルを獲得することはできなかった(陸, 1936)。しかし、その中に陸上競技に参加した選手 23 名の内、19 名が大学生もしくは大学卒業生であり、他の 4 名の出身が不明(表 2-3)であった。すなわち、1936 までに、当時の大学競技スポーツレベルが国レベルと等しいといえ、中国で大学競技スポーツの展開は流行していた。

表2-3. 1936年ベルリン・オリンピック大会の選手統計

項目	名前	性別	年齢（才）	身分	出身校
100m	傅金城	男	25	商	なし
100m	劉長春（卒業生）	男	27	政	東北大学（中国）
100m	程金冠	男	23	学生	東呉大学
110m ハードル	李森	女	19	学生	東南体育学院
110m ハードル	林紹洲（卒業生）	男	27	政	廈門大学
110m ハードル	黄英傑	男	24	学生	中山大学
400m	戴淑国	男	24	学生	廈門大学
800m ; 1500m	賈連仁	男	24	学生	上海体育専門学校
50km 競歩	蔡正義	男	23	商	なし
50km 競歩	周余愚（卒業生）	男	26	商	上海大学
50km 競歩	張造九	男	23	商	なし
50km 競歩	鄭成山	男	22	学生	なし
マラソン	王正林	男	24	学生	なし
十種競技	周長星	男	21	学生	東北大学（中国）
円盤投	冷培根	男	23	学生	南京大学
円盤投	郭潔	男	24	学生	馮庸大学
円盤投	吳必顯（卒業生）	男	23	政	輔仁大学
棒高跳	符保盧（卒業生）	男	23	商	暨南大学
三段跳	王士林	男	22	学生	北京体育専門学校
砲丸投 ; 円盤投	陳寶球	男	25	商	なし
走幅跳 ; 三段跳	司徒光	男	26	学生	嶺南大学

走幅跳；三段跳	張嘉燮	男	21	学生	上海体育専門学校
走幅跳；投げ槍	郝春徳	男	27	学生	東呉大学

(中華全国体育協進会編, 1937, pp. 65－75) より筆者が作成

以上のことから、1936年ベルリン・オリンピック大会の陸上競技に参加した選手はほとんどが大学出身者であり、特に華東地区の選手が多かったことが確認できた。つまり、当時の中国の大学競技スポーツは全国のトップクラスに位置づいており、その中でも特に華東地区の大学競技スポーツの競技レベルは高いものであった。

第3節：本章の総括

本章では、華東地区におけるスポーツの導入過程と華東地区の大学生の国際競技会への出場状況を明らかにすることを目的として、これまで検討を行ってきた。その結果、スポーツが、宣教師、教会大学、在留外国人、YMCAの宣教師などによって中国へ導入されたことや、当時の中国において、大学生の競技レベルが高く、特に華東地区の大学生が多く国の代表チームに選ばれ、極東選手権競技大会と1936年ベルリン・オリンピック大会で活躍していたことが明らかになった。

第1節では、1890年に教会学校のアメリカ人の李藹門教員（Samuel. E. Smalley）によって、スポーツとしての陸上競技が中国に導入されたこと、1891年に上海のセント・ジョンズとイギリスの工部局西童男校によって、中国における最初期の野球の試合が行われたことが確認された。また、確実な資料が見つからず、断定することは難しいが、1890年代ごろにイギリス人によってサッカーが導入されたことが推察された。ほかにも、バスケットボールが1895年に、天津YMCAのライアンによって導入され、翌年に、正式な試合が行なわれ、中国に定着したことが明らかになった。

第2節では、国際大会への出場選手の多くが教会学校とYMCAから輩出されていたことが確認された。そして、極東選手権競技大会において、華東地区の大学生が活躍したこと、当時の中国の競技スポーツは大学生が牽引していたこと、その中でも、特に華東地区の大学生が代表選手の多数を占めていたことが明らかになった。では、華東地区において、大学生たちは、いかにしてスポーツ活動を展開していったのだろうか。この点について、次章で検討していく。

第2章 注釈

注 1) 東華六大学体育運動会とは、1914 年、蘇州の東呉大学により、「東華六大学体育連合運動会」（別称：「華東六大学体育連合会」、ECIAA：East China Intercollegiate Athletic Association）が結成された組織である。当時、「東華六大学体育連合運動会」に参加した 6 つの学校は、上海の南洋、セント・ジョンズと滬江大学、南京の金陵大学、杭州の之江大学、蘇州の東呉大学であった。次章で詳細な検討がある。

注 2) 洋務派とは、中国の清朝末期に軍事活動を中心に近代化を積極的に推進した曾国藩、李鴻章、左宗棠らの官僚グループを指す。その運動を洋務運動と呼ぶ。

注 3) 義和団の乱とは、日清戦争後、山東省付近に清の中期から白蓮教の分派で義和拳という秘密結社があり、それらが生活に苦しむ農民を集めて、各地で外国人やキリスト教会を襲う排外農民闘争である。

注 4) 中華全国体育協進会とは、1910 年に設立され、全国の体育・スポーツ組織を統轄する組織であり、中国のオリンピック委員会の役目を果たしていた。

注 5) 宋如海とは、南京の教会大学である金陵大学の卒業生であり、アムステルダム・オリンピック大会を視察する前に、体育教育を視察するため、アメリカのコロンビア大学で長い時間を滞在していた。ニューヨーク市からアムステルダムに行く安いため、中華全国体育協進会の会長である王正廷により、派遣された。

第 2 章 引用・参考文献

- 成都体育学院体育史研究室（1981）中国近代体育史簡編．北京：人民教育出版社．
- 陳湿明（1991）棒球運動在中国的興起与早期發展．成都体育学院学报，17（2）：21－25．
- 陳湿明，梁友德，杜克和（1990）中国棒球運動史．武漢：武漢出版社．
- 崔樂泉（1998）中国近代体育史話．北京：中華書局．
- 法制晚报（2014）国际万象．2014 年 06 月 10 日，A24．
- 郭振（2013）中国の大学スポーツ研究：三つの時期における大学スポーツの展開，再構築
および発展の検討．早稲田大学 2013 年度博士論文．
- Hui-ch'ing Yen（顏惠慶）East-West Kaleidoscope. 1877-1946: An Autobiography, St.
John's. University Press, 1974, p. 7.
- 交通大学校史撰写組編（1986）福開森（Ferguson）南洋公学早期歴史．西安：西安交通大
学出版社，第 1 卷，p. 13.
- 黎寶駿（1984）セント・ジョーンズ大学体育史略．上海体育史話，第 9 期，1984 年 12 月，
p. 11－35.
- 李輔材，文福祥，董爾智，申恩祿，鐘添發（1991）中国籃球運動史．武漢：武漢出版社．
- 李雪（2015）清末期の天津における新式学校と日本人教習の教育活動．早稲田大学大学院
教育学研究科紀要（別冊）23（1）：61－71．
- 羅時銘，趙セン華（2008）中国体育史．北京：人民体育出版社．
- 陸翔千（1936）参加第十一回世界運動会中華代表团大事記．体育季刊，2（3）：p. 465．
- Mary Lamberton, St. John's University Shanghai 1879－1951, United Board for
Christian Colleges in China, 1955, p.162.
- 容コウ（1969）西学東漸記．東京：平凡社．
- 笹島恒輔（1987）中国の体育・スポーツ史．東京：バースボール・マガジン社．
- セント・ジョーンズ大学五十年史略出版委員会（1972）セント・ジョーンズ大学五十年史略 1879
－1929，台北：台湾セント・ジョーンズ大学同学会．
- 上海交通大学校史編纂委員会編（2006）上海交通大学校紀事：1896－2005，上卷．上海交
通大学出版社．
- 高嶋航（2015）上海セント・ジョーンズ大学スポーツ小史．日本当代中国研究，4，303 - 345．
- T. W. Sung（1912）Basket Ball. SJE, May.

V. K. Yang (1917) Basket Ball Matches. SJE, March.

呉文忠 (1981) 中国体育発展史. 台北：国立教育資料館.

横井和彦, 高明珠 (2017) 中国清末における留学生派遣政策の展開：日本の留学生派遣政策との比較をふまえて. 経済学論争, 64 (1) : 103-143.

中華全国体育協進会編 (1937) 出席第十一回世界運動会中国代表团報告. 上海：中華全国体育協進会.

(HP)

Brathletics

<http://www.gbrathletics.com/ic/fec.htm> (2017 年 12 月 29 日)

FIFA のオフィシャルホームページ

<http://www.fifa.com/about-fifa/who-we-are/the-game/index.html> (2017 年 12 月 27 日)

毎日頭条

<https://kknews.cc/sports/m32rjnp.html> (2017 年 12 月 14 日)

RecordChina

<http://www.recordchina.co.jp/b166836-s0-c50.html> (2017 年 12 月 28 日)

Weibo

<https://www.weibo.com/p/1001603917904331600579> (2017 年 12 月 28 日)

第3章：華東地区における大学スポーツ連盟の組織化

第1章、第2章において、清末から中華民国初期までに、高等教育機関における教会学校の実態、中国におけるスポーツの導入の経緯について明らかにしてきた。そこでは、スポーツは、まず沿岸各地の教会学校に導入され、他の教会学校でも始められ、続いて中国人が経営している学校でも行われるようになったことが確認できた。そのため、競技会も教会大学同士の対抗戦で始まり、総合競技会へ発展していった。また、全国運動会の開催、極東選手権競技大会への参加などで大学スポーツ連盟^{注1)}を含み、様々な体育団体が設立された（笹島，1987，p. 148）。

そして、本章では、1904年から1936年の華東地区における大学スポーツ連盟の組織化の状況^{注2)}について明らかにしていく。

第1節：「中華大学体育連合会」の組織化

本節では、「中華大学体育連合会」の名称の由来について検討を行い、「中華大学体育連合会」がいかにして組織を成立させたのか、またいかなる経緯で解散したのかについて明らかにしていく。

第1項：「中華大学体育連合会」の名称の由来

華東地区において、もっとも早く設立された大学競技スポーツ組織管理機構は、1904年4月23日の「中華大学体育連合会」(CIAA: China Intercollegiate Athletic Association)であった(黎, 1984b, pp. 11-35)。「中華大学体育連合会」は、「四大学体育会」とも呼ばれていたが、1928年に成立した「四大学体育会」と区別するために、以下は「中華大学体育連合会」という名称で扱う。しかしながら、名称に関しては、筆者には疑問がある。具体的には、セント・ジョーンズ学内記事など「IAA: Intercollegiate Athletic Association」という略称で掲載されたことが見られている。また、高嶋(2015)も「上海セント・ジョーンズスポーツ小史(1890-1925)」で以下のことを述べている。

「かくて IAA (Intercollegiate Athletic Association) が成立した。第2回目の会議では、会長に東呉大学のスマート (R. D. Smart), 副会長に南洋の胡詒穀, 秘書にセント・ジョーンズのウォーカー (Millidge P. Walker), 会計に中西書院のホワイトサイド (Joseph W. Whiteside) が選出された。スマートはヴァンダービルト大学時代、万能選手として活躍した経験があり、東呉大学でスポーツを推進していた。唯一の中国人胡詒穀はセント・ジョーンズの卒業生で、在学時は『セント・ジョーンズ・エコー』の編集者をつとめ、卒業後に南洋で英語教員をしていた。」(高嶋, 2015, pp. 322-323)

このように、「中華大学体育連合会」最初の専門役員などを明らかにしたうえで、連盟の名称が「中華大学体育連合会 (CIAA: Chinese Intercollegiate Athletic Association)」ではなく、「IAA: Intercollegiate Athletic Association」という英語の名称で使われていることがわかる。しがしながら、羅(1981, 2005)は、『体育史料第四輯』『奧運来到中国』に

において、中国の華東地区でもっとも早く組織された体育機構は、1904年に設立された「中華大学体育連合会」と主張いる（羅，1981，p. 25；羅，2005，p. 31）。また，上海交通大学史編纂委員会（2006）によると，「中華大学体育連合会」において初めて開催された運動会は，1904年4月に蘇州で行われたという。さらに，郭振（2013）によると，「中華大学体育連合会」の英語名称は「Chinese Intercollegiate Athletic Association」である（郭，2013，pp. 53-54）とのべている。つまり，この組織の名称は，中国語では「中華大学体育連合会」であり，英語では「Chinese Intercollegiate Athletic Association」が妥当ではないかと考えられる。

第2項：「中華大学体育連合会」の設立と解散

1896年ギリシャで発祥したオリンピック大会と学校対抗スポーツが国家の異なる地域をより密接に結びつけ，ただの身体鍛錬ではないことを世界に示すのに成功したことは，広く認められている。前章で明らかになったように，大学スポーツは，当時の中国における競技スポーツ界において重要な存在であった。華東地区の主要な大学はその重要性を認識し，セント・ジョンズ，東呉大学，中西書院，南洋などの4大学から4名の代表が，セント・ジョンズで「中華大学体育連合会」の設立のために，最初の会議を開いた（黎，1984b，pp. 11-35）。

「中華大学体育連合会」が主催した最初の競技会は，1904年11月24日の陸上競技会であり，会場は蘇州の東呉大学であった（上海交通大学校史編纂委員会，2006，p. 45）。第2回は1905年11月9日に南洋で，第3回は1907年11月16日に東呉大学で，第4回は1908年5月14日にセント・ジョンズ書院で，第5回は1909年5月14日に東呉大学で開かれた。結局5回の大会が開催されたにもかかわらず，中西書院は競技会の主催地とならなかった。このほか「中華大学体育連合会」主催のテニス大会が，1907年から始まっているが，1909年が最後の大会となったため，3回しか開催されなかった（高嶋，2015）。

「中華大学体育連合会」は，上海のセント・ジョンズ書院，南洋，中西書院と蘇州の東呉大学4校があり，南洋を除き，他の3つは教会学校であった。南洋は，中国の近代史において，もっとも早く創立された公立学校の1つである（黎，1984b，pp. 11-35）。スポ

ーツは、この4つの学校内では非常に盛んであった。例えば、セント・ジョンズでは、1890年春に教員であった李藹門（Samuel. E. Smalley）の協力により、学校の礼拝堂前で運動会が開かれた。そのあと、定例となり、運動会が毎年2回開催されていた。これは、中国でもっとも早く開催された運動会であったという（高嶋，2015）。また、8年遅れでの1898年、南洋でも学校内で運動会が開催された。当時の上海市民は欧米のスポーツやゲームなどに触れる機会がほとんどなかったため、南洋で開会式を聞いた時、市民は非常に興味を持ち、運動会を見るために徐匯道から行列で混雑していた。もう1つの例は蘇州の東呉大学であり、創立が他の大学よりも遅かったものの、1901年創立当初から積極的にスポーツ活動に参加することを主張していた。そのため、1903年にはすでに「フィットネスクラブ」や「キックボールクラス」、「バスケットボールクラス」、「テニスクラブ」などのクラブタイプのスポーツ団体が作られていた（上海体育志，1996，p. 101）。

しかし、「中華大学体育連合会」は、学校間の球技種目（1907年からのテニス大会）の試合の記録が残っていたにもかかわらず、「中華大学体育連合会」の定期試合の中には球技種目の試合は対象外であった。数年後、大学の間の不和（高嶋，2015）で南洋、中西書院が体育連合会から脱退することになった。また、1909年頃、東呉大学も大学間の同盟関係が不安定で、また、学校の学生数の減少によって試合に出場できる学生も少なかったため、「中華大学体育連合会」の解散を発表した（東呉年刊，1918，p. 119）。

第 2 節：華東地区のスポーツ組織の再構築と「東華六大学体育連合運動会」の設立経緯

本節では、華東地区におけるスポーツ組織の再構築の過程と「東華六大学体育連合運動会」の設立経緯について明らかにしていく。

第 1 項：華東地区のスポーツ組織の再構築

華東地区は大学スポーツ活動がもっとも盛んに行われている地域にもかかわらず、「中華大学体育連合会」の解散により、以前のような盛り上がりがなくなり、停滞状態にあった。

しかしながら、1908 年夏季ロンドンオリンピックの開催と 1910 年極東選手権大会の設立の影響で、華東地区の大学スポーツと体育連合組織の再編が促された。

第三回セント・ルイス・オリンピック大会の開催前後、多くの中国の新聞はオリンピック大会についての様々な記事を掲載した。しかし、これらの新聞記事は、華東地区や華北地区といったスポーツが盛んに行われていた地区を除くと、ほとんど読まれることがなかった。しかしながら、1904 年国際サッカー連盟の発足、1906 年アテネでオリンピック特別大会の開催など国際的スポーツ活動が頻繁になってくることに伴い、1907 年以降、中国で各スポーツ項目に関するニュースはもちろん、オリンピックに関するニュースも徐々に増加していった。例えば、1907 年 10 月 24 日、中国近代で有名な教育者、体育者である南開中学校の校長張伯苓^{注 4)}（以下「張」と略す）、第 3 回天津 YMCA の学校連合運動会の授賞式に出席し、オリンピック大会の参加について、「今回の運動会の成功は、将来、私が国のスポーツ選手がオリンピック大会で大活躍できることを期待している」（羅，1993，p. 145）と激励の言葉を述べたという。張は、他にも「中国は速やかにオリンピックチームを成立させる必要があり、また、現在もっとも必要なことは、選手たちが日々練習し、競技力の向上を図ることによって、自分自身の長所と短所を知ること」（羅，1993，p. 145）が重要であると力説したという。

また、1908 年 10 月下旬には、第 6 回天津 YMCA の学校連合運動会の授賞式で、大きなスライドプロジェクターで非常に盛り上がったオリンピックの開催状況が展示され、授賞式に参加した学生たちは、オリンピック大会の魅力を改めて感じた。その時、天津 YMCA

の米国籍幹事である饒柏森は、すべての地域のスポーツに堪能する人材を活かし、将来的にはオリンピック大会に参加することが可能であると指摘した。最後に、彼は3つの意味深い質問を出した。

- 「1.中国のスポーツ選手はいつオリンピック大会に参加することができるのか？
- 2.中国のチームはいつオリンピック大会に送ることができるのか？
- 3.いつ中国でオリンピック大会を開催し、世界各地の選手たちに北平（北京）の競技会に参加することができるのか？」

（中国人民日報，<http://unn.people.com.cn/GB/22220/35917/35931/2791880.html>）

つまり、オリンピック大会に参加することはもちろん、中国でオリンピック大会を開催したいという希望は、世界の舞台に向かって歩み寄り、中国の競技スポーツの方向を導いた。

1908年第4回ロンドンオリンピック大会の影響に加えて、中国の選手たちが世界の舞台で活躍できたのは「極東選手権競技大会」である。具体的には、1910年前後に、フィリピンの競技スポーツ組織が、オリンピック大会の形で日本、中国とフィリピンで東アジア3カ国が参加する競技スポーツ大会を企画していた。そして、1911年9月には、フィリピンの体育協進会の会長であるブウラン（E. S. Brown）が正式に中国を訪問し、「極東体育協会」という組織を設立させ、3カ国の大都市で2年に1回の大会を開催することを提言していた。この時点で、中国では全国スポーツ組織を統括する機関がなかったが、中国は、大会の開催について強い関心を持っていたため、ブウランの提案に同意し、「極東体育協会」を組織することに対して積極的な態度を示した。続いて、ブウランは日本に渡航し、日本からも承認を得た。1912年、日本、中国、フィリピン3カ国の協議の結果、正式に「極東体育協会」を設立し、1913年2月に、フィリピンの首都マニラの極東選手権大会で最初の競技大会を開催することが決定した。

「極東体育協会」は、当初の設立は、国際オリンピック委員会（IOC：International Olympic Committee）に連絡することは一切なかった。しかし、1915年第2回極東選手権大会の開会式の直前、極東選手権大会を主催する上海YMCAは国際オリンピック委員会から「極東選手権大会を東方の代表として認め、将来的には、「極東体育協会」の会長は「国際オリンピック委員会」に会議などに参加するため、代表を送る義務がある。また、

中国の代表チームは次のオリンピック大会に参加すべきだ」という電報を受けた（羅, 1993, p. 147）。これは中国と国際オリンピック委員会との間の最初の連絡であったという。

しかしながら、第一次世界大戦の勃発により、中国のオリンピック大会への参加への要望はすぐには実現しなかった。

第2項：「東華六大学体育連合運動会」の成立経緯

1914年4月、「東華六大学体育連合運動会」（「東華六大学連合運動会」という）の設立の前、上海YMCAによって「東華体育運動組合」が設立された。具体的には、優秀なスポーツ選手を選び、極東選手権競技大会に参加するため、1913年に北京はすでに「華北体育連合会」を発足した。上海は北京の影響で、華東地区の優秀なスポーツ選手を集めるために、翌年の1914年、華東地区の各学校のスポーツ選手を統括・管理する組織である「東華体育運動組合」を設立させた。

以下の表3-1は、1936年までに設立された主な体育団体である。

表3-1. 1936年までに設立された主な体育団体

数	名称	成立都市	所屬地域	時間（年）
1	北京体育研究社	北京	華北	1912
2	北京体育競進会	北京	華北	1912
3	華北体育連合会	北京	華北	1913
4	東華体育運動組合	上海	華東	1914
5	中華武術会	上海	華東	1918
6	華南体育会	広州	華南	1920
7	中華業余運動連動会	北京	華北	1922
8	華中体育会	漢口	華中	1923
9	中華全国体育協進会	上海	華東	1924
10	中央国術館	南京	華東	1928
11	中華競走会	上海	華東	1929

12	東北体育協会	北京	華北	1933
13	中央国術体育研究会	南京	華東	1935
14	中華体育学会	南京	華東	1936

(笹島, 1987, p. 148) により筆者が作成

「東華体育運動組合」は、上海 YMCA で開会式を行い、陸海軍大元帥統率弁事処弁事員（1920 年中華民国の代理国務総理をつとめていた。）である薩鎮冰は組合長、蘇州の東呉大学の体育教員であるスマート（R. D. Smart）は副組合長に任命されたことを公表した（犀, 1914, p. 65-68）。

スマートは、アメリカ人で、1903 年から蘇州の東呉大学で体育教員として体育・スポーツの活動をしていた。1904 年には、東呉大学の最初の陸上競技代表チームを創設し、同時に「中華大学体育連合会」を立ち上げた。また、スマートは「東華六大学体育連合運動会」の創立者であり、その後「華東八大学体育連合会」の秘書でもあり、第 1 回極東選手権大会の執行委員も務めた（東呉学報, 1921, p. 104-107）。東呉大学の体育教員として、彼はかつて学校におけるスポーツ昇進を積極的に推進した。また、彼は、東呉大学での体育・スポーツの展開だけでなく、華東地区の地域全体の活動における学校体育・スポーツの発展にも重要な貢献をしていると認められ、現代中国のスポーツの歴史に功績を残した体育・スポーツの専門家であった（王国平, 2003, pp. 72-73）。



図 2. 司馬德（中国名）・スマート（R. D. Smart）（王国平, 2003, pp. 72-73）

1914年5月、東呉大学の提案に基づき、「東華六大学体育連合運動会」（別称：「華東六大学体育連合会」、ECIAA：East China Intercollegiate Athletic Association）が結成された。当時、「東華六大学体育連合運動会」に参加した6つの学校は、上海の南洋、セント・ジョンズと滬江大学、南京の金陵大学、杭州の之江大学、蘇州の東呉大学であった。東呉大学のスマートが華東地区のスポーツ界に与える影響が大きかったため、6大学の代表は全員一致で東呉大学を連盟のリーダーとして選出した（郝，1926，pp. 177－185）。

また、「東華六大学体育連合運動会」の前身である「中華大学体育連合会」は華東地区で組織され、直接に華東地区の大学スポーツ組織の発展に大きな影響を及ぼしている。したがって、中華民国に入ってから設立された大学スポーツ組織の検討を行うため、1904年にさかのぼって「中華大学体育連合会」その組織の状況を理解する必要がある。

「中華大学体育連合会」は、地域ごとに機能している大学スポーツ組織である。1904年から、毎年春と秋、順番で4つの学校で開催されている。主な競技種目は陸上競技であり、最初の競技会は蘇州の東呉大学で行われた（上海交通大学校史編纂委員会，2006）。陸上競技以外には、学校間の球技の試合も行われた。例えば、セント・ジョンズと南洋のサッカーの試合は1903年の開始以来、1926年まで毎年定期的に行っていた。もう1つの例は蘇州の東呉大学で、1906年蘇州の翠英書院と校外間のサッカー試合の記録があった（楊，1923）。

「中華大学体育連合会」は長年にわたり存在することがなく、組織体制も完璧ではなかったが、中国の華東地区における大学スポーツの早期普及と発展のために、スポーツが中国での早期発展を促進することにもっとも大きな影響を与えることが明らかにした。したがって、その後設立された「東華六大学体育連合運動会」の創設に役に立った。

「東華六大学体育連合運動会」の競技種目と試合のシーズンは、サッカーが9月から12月、陸上競技が2月から5月、テニスおよび野球が5月から6月、バスケットボールが12月から3月であった。「東華六大学体育連合運動会」の第1回大会は、1914年5月16日に東呉大学が開催した陸上競技会であった（黎，1982，p. 13）。

1914年、「東華六大学体育連合運動会」は陸上競技会とサッカーしか開催していなかったが、1915年には野球とテニス、この2つの種目が追加され、1917年春（1916－1917年度の競技会）にはバスケットボールが追加された。この5つの種目は、「華東地区八大学体育連合会」が誕生するまで続いていた（黎，1984b，p. 11－35）。

以下の表3-2は、種目ごとに「東華六大学体育連合運動会」（1914－1920年）の優勝者をまとめたものである。

表3-2. 「東華六大学体育連合運動会」歴代（1914－1920年）優勝者

回目	年次	陸上競技会	サッカー	野球	テニス	バスケットボール	その他
1	1914－1915	セント・ジョーンズ	南洋	なし	なし	なし	
2	1915－1916	セント・ジョーンズ	南洋	セント・ジョーンズ	東呉大学	なし	野球とテニス追加
3	1916－1917	記録なし	南洋	記録なし	セント・ジョーンズ	南洋	バスケットボール追加
4	1917－1918	南洋	セント・ジョーンズ	セント・ジョーンズ	セント・ジョーンズ	記録なし	
5	1918－1919	南洋	南洋	記録なし	セント・ジョーンズ	セント・ジョーンズ	
6	1919－1920	南洋	南洋	滬江大学	セント・ジョーンズ	滬江大学	

「上海体育史話」「南洋週刊」「申報」「東呉年刊」「東呉学報」をもとに筆者が作成

第3節：「華東八大学体育連合会」の成立と分裂

本節では、「華東八大学体育連合会」の成立と分裂の過程について明らかにしていく。

第1項：「華東八大学体育連合会」の成立経緯

1919年北京の学生を中心に各地の学生、市民、商人が、パリ講和会議のベルサイユ条約^{注6)}の結果に不満を抱き、5月4日に反帝国主義が北京から全国の各地に広がっていった（五四運動）。抗日を掲げる五四運動は、文化運動と社会的・政治的運動でもあった。そして、この運動では、青年有識者が近代的な知識や文化を中国に導入した。哲学、倫理学、社会学、政治学、経済学などの諸学問を学び、孔子が提唱した儒教に代表される旧文化・旧道德の打破、文学改革、人道主義、後の簡体字の制定につながる文字改革など、これらの主張を行う新文化運動^{注7)}と連動している点も重要な要素である（武，2017）。したがって、五四運動の前後に、中華民国の文化、社会政治において変化が起こった。この変革運動の中、中華民国の国情に合う体育・スポーツ思想と理論が現れ、スポーツが中国での発展を促進するだけでなく、「華東八大学体育連合会」の誕生にきっかけになった。

五四運動で袁世凱の後継者である北京の軍閥政権は学生を多数逮捕したため、1919年の五四運動が終わった後、ほぼすべての国内の学校が通常通りの授業ができなくなり、スポーツ活動も行うことができなくなった（武，2017）。そして、「東華六大学体育連合運動会」の活動も1年間中止された。1920年冬になると、「東華六大学体育連合運動会」が、組織改革を行い、南京の東南大学と上海の復旦大学が「東華六大学体育連合運動会」に加入し、8つの大学からなる「華東八大学体育連合会」（華東八大学体育連合会とも呼ぶ）が正式に誕生した。八大学は蘇州の東呉大学、上海の南洋、セント・ジョーンズ、滬江大学、復旦大学、南京の南京大学、東南大学、杭州の之江大学であった。主な責任者は東呉大学のスマート、南洋のレスリーおよび東南大学のマックロイであった。スマートが「華東八大学体育連合会」の会長（書記）として選出されたが、1年後の1921年に病気で死去した。その後同じく東呉大学の体育教員であるアメリカ人ナッシュ（W. I. Nash）がスマートの代行で会長（書記）を務めていた（彭，1929，p. 195）。

「華東八大学体育連合会」の設立は、間違いなく華東地区のスポーツ界にとって大きな

出来事であった。なぜなら、「東華六大学体育連合運動会」の時代とは異なり、「華東八大学体育連合会」は、より厳格な組織体制（中華全国体育協進会年刊，1928，pp. 255－257）が整えられており、会員の権利と義務に関する詳細な規則が設けられていたからである（中華全国体育協進会年刊，1928，pp. 258－263）。

以下の表3-3は、種目ごとの「華東八大学体育連合会」歴代（1920－1926年）の優勝者をまとめたものである。

表3-3. 「華東八大学体育連合会」歴代（1920－1926年）優勝者

回目	年次	陸上競技 会	サッカー	野球	テニス	バスケット ボール	バレーボ ール	その他
1	1920－1921	復旦大学	セント・ジョンズ	なし	なし	セント・ジョンズ	なし	
2	1921－1922	東呉大学	セント・ジョンズ・滬江大学・南洋	なし	滬江大学	セント・ジョンズ	なし	
3	1922－1923	東呉大学	南洋	南洋	記録なし	南洋	なし	野球継続
4	1923－1924	東南大学	セント・ジョンズ	セント・ジョンズ	滬江大学	復旦大学	なし	
5	1924－1925	セント・ジョンズ	滬江大学	滬江大学	滬江大学	セント・ジョンズ	なし	
6	1925－1926	金陵大学	金陵大学	なし	なし	滬江大学	金陵大学	バレーボール追加

「申報」「中華全国体育協進会年刊」「教育雑誌」をもとに筆者が作成

第2項：「華東八大学体育連合会」の分裂

1925年の五・三〇事件^{注3}により、「華東八大学体育連合会」は再び政治運動に巻き込まれていった。具体的には、5月30日に2000人以上の上海の学生が外国人の租界で労働者たちの権利を主張し、中華民国政府が外国人の租界を自分の管轄範囲に回収すべきだと要求しているが、100余人の学生が外国人の巡捕に逮捕された。その後、10,000人以上の人々、上海の普通の市民も集まり、南京路巡捕房の前で抗議を行い、逮捕された学生を解放し、「帝国主義を倒す」というスローガンを唱えた。しかし、イギリスの巡捕が銃撃によって普通の市民を虐殺し、多数の傷者が出て、13人が死亡した。この事件は、現代中国の歴史の中で有名な「五・三十惨案」という。さらに、教会大学の若干の愛国教員や学生が、帝国主義の経済的侵略に抗議し、教会大学を去った。例えば、セント・ジョンズを去った教員や学生の一部が光華大学の結成に努力し、滬江大学を離れた教員や学生たちが持志大学の成立に尽力した（黎，1982，p. 13）。これらの新しく設立した大学は、自分の連合組織を結成し、「華東八大学体育連合会」と競合する独自の共同組織の設立を目指していた。

さらに、「華東八大学体育連合会」の内部にも危機が発生し始めた。その原因は、南洋がセント・ジョンズを非難し、セント・ジョンズの会員資格を取り消すことを提案したことであった。そして、もしセント・ジョンズが「華東八大学体育連合会」を脱退しなければ、南洋が自ら脱退するという主張をした。この危機の発生経由については、「申報」の中に、「大学体育会討論セント・ジョンズの資格問題記」という詳細な記事がある。

「南洋はセント・ジョンズの会員資格を取り消す理由が、セント・ジョンズの学生は中国の国旗を奪い、破ったことは中国を侮辱したと等しいと出張した。スポーツは人格の基礎の上に建設されるべきで、人格なくして体育はない、本校内部の意見が一致し、セント・ジョンズの会員資格を取りけることを提出する。もし、セント・ジョンズの会員資格の取り消しが認められなければ自ら脱退する」（申報，1925年10月06日付）

当時の「華東八大学体育連合会」会長はセント・ジョンズの沈嗣良であった。沈会長はこの提案を受けて、10月5日の午後4時、四川路の青年会会館で重要な臨時会議を開催した。会議には南洋、セント・ジョンズ、滬江、復旦、東南、東呉、金陵など7つの大学から委員と学生の代表が参加し、司会は本来、会長である沈嗣良が務めるべきであったが、

当事者なので回避し、副会長の張信孚（金陵大学）が務めた。南洋の提案が各大学に朗読され、意見を述べ合った。東呉大学の代表は、会員資格の停止は「華東八大学体育連合会」の規則を破壊するか、スポーツの原則に違反した場合に成されるべきであると主張し、金陵大学の代表はスポーツと政治を区別するべきであると述べた。また、東南大学の代表は、セント・ジョーンズの1年間の活動停止処分を提案した。その他、学生は、南洋に賛成するものが多かった。セント・ジョーンズの代表は、学校代表チームの意見書を配布し、スポーツに政治を持ち込んでではなく、会員資格停止の処分は不当だと主張した。金陵大学の代表は、この提案は慎重に検討すべき事案であるため、一度帰校して各学校の内部の意見を得てから票決すべきだと提案した。その結果、決定は1週間延期された（申報、1925年10月06日付）。

1週間後、南洋の提案の投票結果について、「華東八大学体育連合会」の書記を務めているナッシュ（Willard L. Nash）から発表がなされ、賛成6票、反対8票で否決された（申報、1925年10月14日付）。したがって、10月14日、南洋は「華東八大学体育連合会」に抵抗し、以下のように脱退の宣言をした。

「五・三〇事件でセント・ジョーンズの学生が、良心に駆られて救国に立ち上がったものの、学校当局は彼らを圧迫し、国旗に侮辱を加えた。人道護持を称する外国人の化けの皮がすっかり剥がされた。列強の「順民養成所」である教会学校が断固として反抗したのは今回が初めてである。「華東八大学体育連合会」は、スポーツの組織であり、政治外交問題を持ち込んでではないという意見があったそうだが、体育や知育は人格の基礎の上に建設されるべきで、スポーツの規則はみな道徳、人格をその基礎としている。人格なくしてスポーツはない。セント・ジョーンズの外国人教員が中国の国旗を侮辱し、青年の愛国運動を圧迫した。これは国体、人格に対するこの上ない恥辱である。南洋の提案は、体育会の組織を破壊するために出されたと言うものがあるが、外国人の指図の下で民族精神を喪失し、それでうまくいくのだろうか。」（申報、1925年10月16日付）

一方、南洋が「華東八大学体育連合会」から脱退した後、セント・ジョーンズは、1年間の活動停止を申し出ていた（申報、1925年10月17日付）。したがって、これは「華東八大学体育連合会」のスポーツ活動が行われなくなり、組織の分裂の原因となった。

「華東八大学体育連合会」が分裂した後、元「華東八大学体育連合会」メンバーである滬江大学、金陵大学、東呉大学、セント・ジョーンズは、1928年「四大学体育会」(Big Four Conference)を設立し、学校間のスポーツ交流を継続していた。1928年から1932年にかけて、4年間の間、3回の大会が開催された。

「四大学体育会」は1928年から復旧し、通常のスポーツ活動を継続しているほか、「華東八大学体育連合会」の元メンバーであった南洋、復旦大学と光華大学が1926年から「江南大学体育協会」(Kiangnan Intercollegiate Athletic Association)を発足し、1936年までに、11回の大会が開催された(申報, 1936年06月01日付)。

第4節：「四大学体育会」と「江南大学体育協会」の設立と解散

本節では、「華東八大学体育連合会」の分裂により、各大学がスポーツ交流を継続しに行くため、新しい組織である「四大学体育会」と「江南大学体育協会」の成立と解散状況を明らかにしていく。

第1項：「四大学体育会」の成立と解散

1925年10月頃、南洋の呼びかけに応え、復旦大学も「華東八大学体育連合会」から脱退することを決めた。そして、セント・ジョーンズが1年間の活動自粛を申し出ていたため、1925－1926年度の第12回球技大会（野球は中断）および陸上競技会に参加した学校は滬江大学、金陵大学、東呉大学、之江大学4つの教会大学であった。つまり、8つの大学からなる体育連合会であったにも関わらず、4つの大学しか出場していなかったのである。1926年9月、「華東八大学体育連合会」の委員会の決議で、当年度（1926－1927）のすべての種目の大会を中止することが決められた（申報，1926年09月21日付）。そのあと、再び大会が開かれることはなく、「華東八大学体育連合会」は事実上の解散を迎えた。

1928年5月27日、滬江大学、金陵大学、東呉大学、之江大学の4校によって、新たに「四大学体育会」が設立された。「四大学体育会」の設立によって、メディアや大学、民衆など多くの人々は、華東地区のスポーツ界の復興を期待していた。「四大学体育会」が設立する直前に、役員が任命された。会長は金陵大学の張信孚、副会長は之江大学の王福泉、書記は滬江大学の宋君復であった。会員は滬江大学、金陵大学、東呉大学、之江大学の4つの大学だけであったが、各学校の付属学校の学生も選手として出場することは可能であった（申報，1928年05月28日付）。

また、「四大学体育会」が設立して以来、初めて開催された大会は、10月のテニス大会であった。その後は、毎年定期的に各種目の競技会が行われるようになり、テニスとサッカーは秋に、陸上競技とバスケットボールは春に行われた。バレーボールは初回が春に行われたが、第2回目からは秋に行うようになった。

1932年に「四大学体育会」において解散の危機が生じた。まず、「四大学体育会」は、華東地区の大学間のスポーツ交流や競技大会を共催するため、「江南大学体育協会」と合併

する意図があった。しかし、この提案に対し、「江南大学体育協会」側は、同意の条件として、新しい組織の名称を「江南大学体育協会」にすることを求めた。「四大学体育会」は、上記の条件は、合併ではなく、「四大学体育会」が解散し、「江南大学体育協会」に改めて加入すること等しいと抗議した。結局、合併の提案は結論が出なかったため、「四大学体育会」は各大会を復旧しようとしたが、蘇州の東呉大学と上海の滬江大学は学内の仕事が多いため、他校とのスポーツ活動に参加し続けることができないと主張した（金陵大学校刊、1932年11月付）。その結果、「四大学体育会」は、実質的に之江大学と金陵大学の2校しか残っておらず、事実上の解散となった。

加えて、「四大学体育会」は「江南大学体育協会」との合併も実現されず、東呉大学と滬江大学が再び「四大学体育会」が主催していて大会に参加する意思を示すことはなかった。そのため、1933年2月、金陵大学は「江南大学体育協会」への加入を要請した（金陵大学校刊、1932年2月付）。その結果、1ヶ月後の3月、金陵大学が「江南大学体育協会」に加入することが決まった（金陵大学校刊、1933年03月付）。

以下の表3-4は、種目ごとの「四大学体育会」歴代（1928-1931年）の優勝者である。

表3-4. 「四大学体育会」歴代（1928-1931年）優勝者

回目	年次	陸上競技会	サッカー	バスケット ボール	バレーボ ール	テニス	長距離ランニン グ（5マイル）	全能 種目
1	1928- 1929	滬江大学	東呉大学	滬江大学	金陵大学	東呉大学	滬江大学	なし
2	1929- 1930	金陵大学	滬江大学・ 金陵大学	滬江大学	東呉大学	金陵大学	金陵大学	滬江 大学
3	1930- 1931	フィールド： 金陵大学 トラック：滬 江大学	滬江大学	滬江大学・ 之江大学・ 金陵大学	記録なし	金陵大学	金陵大学	なし

「申報」をもとに筆者が作成

第2項：「江南大学体育協会」の成立と解散

先述したように、「華東八大学体育連合会」が分裂した後、元「華東八大学体育連合会」の加盟大学である滬江大学、金陵大学、東呉大学、之江大学によって1928年に「四大学体育会」が設立され、学校間のスポーツ交流を継続していた。1928年から1932年にかけて、3回の大会が開催された。「四大学体育会」は1928年から復旧し、通常のスポーツ活動を継続しているほか、「華東八大学体育連合会」の元メンバーであった南洋、復旦大学などが1926年から「江南大学体育連合会」に発足し、1936年までに、11回の大会が開催された。

1925年10月には、「華東八大学体育連合会」から南洋の脱退が発表されたが、これを原因として復旦大学も競技会に出場しなかったが、同時期に光華大学が生まれたので、別の大学スポーツ連盟を設立させる提案があった。長い間、前述の3つの学校では、意見交換が行われており、新しいスポーツ連盟の設立が必要だと感じていた。そこで、1926年3月、江南地域の大学スポーツの促進を目的として「江南大学体育協会」(Kiangnan Intercollegiate Athletic Association)という別のスポーツ連盟を設立することにした。凌鴻勛、郭任遠が会長、容啓兆、李惠堂、呉邦偉、丁人鯤が副会長に決まった(申報、1926年03月14日付)。

1926年の設立当時、「江南大学体育協会」の会員は、南洋、復旦大学、光華大学の3校で、1926年に持志大学(申報、1926年04月17日付)、中国公学(申報、1926年05月01日)、暨南大学(申報、1926年09月27日付)が加入して6大学になった。また1928年と1929年には、大夏大学(申報、1928年11月26日付)と中央大学(東南大学)(申報、1929年03月25日付)が続いて「江南大学体育協会」の会員になった。そこで、「江南大学体育協会」は8校に増加し、それは「江南八大学体育協会」とも呼ぶ。しかし、1932年に、会員の変動があつて、中国公学は、1932年1月28日上海で起こった上海事変^{注9)}の影響で、学校の建物が破壊され、スポーツ活動はもちろん、普通の授業も中止した状態で、大学は「江南大学体育協会」からの脱退を宣言した(瀋、1995, p. 47)。同年、「四大学体育会」がすでに事実上の解散をしていたため、1933年2月に金陵大学の元会員は、中国公学の代わりに「江南大学体育協会」に加入した(申報、1933年02月28日付)。

1926年の設立以来、「江南大学体育協会」の加盟大学は、競技中の紛争による暴力事件の発生のため、処分を受けて、いくつかの学校は途中で自ら「江南大学体育協会」から撤退したことがある。

1928 年に第 2 回のバスケットボール大会が行い、光華大学と暨南大学の対戦で、光華大学の一部の学生選手は試合でトラブルがあり、暨南大学の学生選手梁官松らを殴った。審判員もこのトラブルに巻き込まれた。その後、暨南大学の梁官松は事実に基づいて、抗議を提出した。したがって、「江南大学体育協会」の執行委員会が会議を開催し、光華大学が「江南大学体育協会」の各大会に 6 ヶ月間参加するのを禁止した（申報，1928 年 03 月 10 日付）。

これらのことから、「中華運動裁判会」は、定期的な会議で「江南大学体育協会」は正式な謝罪を行わなかったため、両者の関係が悪くなり、公式の謝罪の前に、「江南大学体育協会」の様々な競技で審判の実施を受け入れてはならないことに決めた（申報，1928 年 03 月 15 日付）。一年後、「江南大学体育協会」は重要な会議を開き、「中華運動裁判会」に正式な謝罪をした（申報，1929 年 01 月 14 日付）。

さらに、1928 年、第 2 回のバスケットボール大会で、持志大学と復旦大学の間、試合も紛争が発生した。事故後の直前、復旦大学は職員と学生選手の会議を開き、「江南大学体育協会」に脱出することが決まった。その時、半年間の出場が禁止されている光華大学も復旦大学の脱出の影響で、正式に「江南大学体育協会」を脱退した（申報，1928 年 04 月 14 日付）。

その後、「江南大学体育協会」は 1926 年に復旦大学が陸上競技会で獲得したチャンピオンカップを体育協会に返却することを要求した（申報，1928 年 06 月 28 日付）。チャンピオンカップは永久保存権になるために 3 年間の優勝を取られなければならない。復旦大学が「江南大学体育協会」を脱退した時、陸上競技会のチャンピオンを 2 回しか獲得していなかった。しかし、この 2 校は 1928 年の（光華大学）と 1931 年（復旦大学）で「江南大学体育協会」に再入会した（申報，1930 年 05 月 12 日付）。

当時の体育協会の試合では、紛争が多発した。1933 年の第 8 回サッカー大会では、南洋の学生が審判員を殴り、「江南大学体育協会」によって 1 年間の出場禁止の処分を受けた（申報，1933 年 12 月 29 日付）。そして、1935 年に第 8 回バスケットボール大会の時から、南洋と大夏大学両校は学校内のスポーツの実施を中心に行うため、「江南大学体育協会」の参加はしていなかった（申報，1934 年 09 月 27 日付）。

また、「江南大学体育協会」は、厳格な組織規則を有していた。具体的には、組織の枠組み、会議決議プロセス、メンバーシップの権利と義務の明記、ゲームの詳細なルールなどがあった（中華全国体育協進会年刊，1928，pp. 264－273）。

以上のことから、「華東八大学体育連合会」は1926年に解散後、一部の学校は別に「江南大学体育協会」を成立させ、そのメンバーは復旦大学、南洋、光華大学3つの元「華東八大学体育連合会」の会員であり、持志大学、暨南大学、中国公学、大夏大学、中央大学（元東南大学）、金陵大学、金陵大学を加えて、統計には10校があり、全国最大な大学スポーツ組織となった。「江南大学体育協会」の主催で、1926年から様々な大会が行われ、「華東八大学体育連合会」の陸上競技、バスケットボール、テニス、野球を継続的に開催するほか、バレーボール、長距離ランニング（5マイル）、全能種目^{注8)}、水泳も新しい種目として、大会が開かれた。

以下表3-5と表3-6は、「江南大学体育協会」の競技会の各種目の歴代（1926-1936年）優勝者を示したものである。

表3-5. 「江南大学体育協会」歴代（1926-1936年）優勝者

回目	年次	陸上競技会	サッカー	バスケットボール	テニス バレーボール
1	1926	復旦大学	復旦大学	復旦大学	復旦大学
2	1927	なし	暨南大学・光華大学・南洋	なし	復旦大学
3	1928	暨南大学	暨南大学	暨南大学	なし
4	1929	暨南大学	暨南大学	光華大学	なし
5	1930	中央大学	暨南大学	暨南大学	なし
6	1931	フィールド：中央大学 トラック：暨南大学 女子：中央大学	暨南大学	男：持志大学 女：記録なし	男：復旦大学 女：暨南大学
7	1932	なし	暨南大学	なし	なし
8	1933	フィールド：中央大学 トラック：光華大学 女子：中央大学	暨南大学	男：大夏大学 女：暨南大学	男：復旦大学 女：暨南大学
9	1934	同上	暨南大学	男：復旦大学 女：暨南大学	男：復旦大学 女：暨南大学

10	1935	フィールド：中央大学 トラック：中央大学	光華大学	暨南大学	復旦大学
11	1936	フィールド：復旦大学 トラック：光華大学	なし	暨南大学	復旦大学

「申報」をもとに筆者が作成

表3-6. 「江南大学体育協会」歴代（1926－1936年）優勝者

回目	年次	野球	長距離ランニング (5マイル)	全能種目	水泳	その他
1	1926	なし	記録なし	なし	なし	
2	1927	なし	復旦大学	なし	なし	
3	1928	交通大学	交通大学	なし	なし	野球継続
4	1929	交通大学	光華大学	なし	なし	
5	1930	交通大学	光華大学	なし	暨南大学	水泳追加
6	1931	記録なし	記録なし	なし	男：暨南大学 女：暨南大学	女子種目 追加
7	1932	なし	中央大学	なし	なし	
8	1933	記録なし	中央大学	春：光華大学 秋：中央大学	暨南大学	全能種目 継続
9	1934	なし	復旦大学	中央大学	記録なし	
10	1935	なし	復旦大学	なし	なし	
11	1936	なし	なし	なし	なし	

「申報」をもとに筆者が作成

第5節：本章の総括

本章では、清朝末期から中華民国初期までの高等教育機関におけるスポーツ連盟の成立過程を明らかにすることを目的とした。

第1節では、中華大学体育連合会の名称の由来に対する検討を通して、1904年に大学スポーツは競技スポーツの重要な一貫として、華東地区の主要な大学はその重要性を認識し、セント・ジョーンズ、東呉大学、中西書院、南洋などの4大学から4名の代表が、セント・ジョーンズで「中華大学体育連合会」の成立したことが明らかになった。また、「中華大学体育連合会」が、主に陸上競技会を開催し、1909年頃、大学間の同盟関係が不安定で、学校の学生数の減少によって試合に出場できる学生も少なくなったため、「中華大学体育連合会」が解散したことが明らかになった。

第2節では、極東選手権大会の好成績の獲得と将来オリンピック大会に参加への要望に応じ、華東地区のスポーツ組織の再構築が行われた。また、1914年5月、「中華大学体育連合会」の復活を目論み、蘇州の東呉大学の提案に基づき、「東華六大学体育連合運動会」が結成されたことが明らかになった。

第3節では、五四運動と文化運動の変革の影響で、中華民国の国情に合う体育・スポーツ思想と理論が現れ、スポーツの中国での発展を促進するだけでなく、「華東八大学体育連合会」の誕生にきっかけになった。また、セント・ジョーンズの外国人教員が中国の国旗を侮辱したため、南洋の脱退とセント・ジョーンズの1年間活動中止によって、「華東八大学体育連合会」は、組織が分裂していったことが明らかになった。

第4節では、「華東八大学体育連合会」の分裂後、各大学がスポーツ交流を継続していくため、元「華東八大学体育連合会」メンバーである滬江大学、金陵大学、東呉大学、セント・ジョーンズなど教会大学が、1928年「四大学体育会」(Big Four Conference)を設立させた。また、「華東八大学体育連合会」の元メンバーであった南洋、復旦大学と光華大学が1926年から「江南大学体育協会」を発足させ、1936年までに、11回の大会が開催されていたことが明らかになった。

第3章 注釈

注 1) 「大学スポーツ連盟」は、序章で定義したように、組織名がしばしば変更するため、
「中華大学体育連合会」、「東華六大学体育連合運動会」、「華東八大学体育連合会」、
「四大学体育会」、「江南大学体育協会」などの総称で統一されるものである。

注 2) 「大学スポーツ連盟の組織化の状況」は、表 3-7 のとおりである。

表 3-7. 大学スポーツ連盟の組織化の状況

西暦	主 要 事 件
1890	中国スポーツ史上初の近代運動会は開催。主催地はセント・ジョンズ。
1894	3 月朝鮮に甲午農民戦争勃発。8 月日清戦争勃発。
1898	南洋が校内運動会を主催し始める。
1903	セント・ジョンズと南洋両校のサッカー試合が始める。 東呉大学校内ではサッカー、テニス、バスケットボールなどのスポーツクラブが現れた。
1904	「中華大学体育連合会」(CIAA: Chinese Intercollegiate Athletic Association) (別称: 四大学体育会) が成立された。成立された項目は陸上競技項目だけで、東呉大学で四大学初の回陸上運動会が開催された。
1909	「中華大学体育連合会」が解散。
1911	10 月辛亥革命。
1912	1 月中華民国南京臨時政府成立。孫文臨時大總統就任。アジア最初の民主共和国 (中華民国) 誕生。
1914	「東華六大学体育連合運動会」(別称: 「東華六大学体育連合運動会」, ECIAA: East China Intercollegiate Athletic Association) が成立され、陸上競技とサッカーなど項目が展開。蘇州の東呉大学で六大学初回運動会が開催された。
1915	「東華六大学体育連合運動会」が野球とテニスという二つの項目を追加。
1917	「東華六大学体育連合運動会」がバスケットボールを新しい項目として追加。
1919	5 月 「五・四運動」開始。列強による 14 ヶ条平和原則裏切りに学生が憤激、一般市民がこれに呼応、逮捕された学生の釈放、講和条約調印拒否などを要

	求，民族独立と抗日運動に発展。
1920	「東華六大学体育連合運動会」の組織改革が行った，「華東八大学体育連合会」（別称「東方八大学体育連合会」）が誕生。八大学の初回サッカー戦が行なった。セント・ジョーンズは初回のサッカー戦で優勝。
1921	初回「華東八大学体育連合会」陸上競技運動会は東呉大学で開催され，「華東八大学体育連合会」初代書記スマート病死。 初回のテニス試合が行ない，滬江大学が優勝。 初回のバスケットボール戦が行ない，セント・ジョーンズが優勝。
1923	「華東八大学体育連合会」初回野球戦を行ない，セント・ジョーンズが優勝。
1925	五・三〇運動。これをきっかけに全上海で反帝（特に日・英）が起こった。 五・三〇運動は全中国に「打倒帝国主義」「民族統一戦線」成立の大きな契機となった。 南洋が八大学体育連合会を退会し，一年の間にセント・ジョーンズは八大学が開催された大会に出ない。
1926	「華東八大学体育連合会」が分裂。 元の華東八大学中の復旦大学，南洋，光華大学が「江南大学体育協会」を成立させ，同年持志大学，中国公学，暨南大学がその「江南大学体育協会」に加入した。 「江南大学体育協会」は初回のバスケットボール，陸上競技，テニス，バレーボールと長距離ランニングの大会が行なった。
1927	戦争と国民党軍隊が上海に到着したため，「江南大学体育協会」は今回の陸上競技運動会とバスケットボール大会を中止。
1928	復旦大学が「江南大学体育協会」を脱退。 光華大学は半年間出場禁止。 江南大学で初回野球戦が開催され，南洋が優勝をした。 「江南大学体育協会」のバレーボール大会は行わなかった。 元八大学の中に滬江大学，金陵大学，東呉大学，之江大学が集まり，「四大学体育会」（別称：「華東四大学体育連合会」， Big Four Conference ）を設立し，陸上運動会，バスケットボール，バレーボール，テニス，野球，サッカーお

	よび長距離ランニングなどの試合を開催した。
1929	中央大学と大夏大学が「江南大学体育協会」に加入。 1928年と同様に、江南大学体育協会のバレーボール大会は行わなかった。 四大学が初回の全能種目が開催され、滬江大学は初回の全能種目大会で優勝。
1930	復旦大学が「江南大学体育協会」に再入会。 「江南大学体育協会」が初回の水泳大会を開催し、暨南大学が初回の水泳大会で優勝。
1931	「江南大学体育協会」は、初めて女子の陸上競技、バスケットボール、バレーボールおよび水泳の試合を開催し、中央大学が初回の陸上競技会で優勝、暨南大学が初回のバレーボール大会と水泳大会で優勝した。
1932	上海事変のため、中国公学の校舎が壊され、中国公学は「江南大学体育協会」から脱出。 戦争のため、サッカー、テニスおよび長距離ランニングの大会しか開催されなかった。 「四大学体育会」と「江南大学体育協会」の合併はできなかった。
1933	金陵大学が「江南大学体育協会」に加入、四大学体育会が解散。
1934	「江南大学体育協会」のバレーボール大会は行わなかった。 南洋が一年間出場禁止。
1935	「江南大学体育協会」のバレーボールと水泳大会は行わなかった。 女子各大会が中止。
1936	「江南大学体育協会」が陸上競技、バスケットボールおよびバレーボールの大会しか開催しなかった。 「江南大学体育協会」は秋季「上海各大学体育協会」に改名。事実上解散となった。

「申報」と「中国近現代史」（小松晋治・丸山松幸，1986）をもとに筆者が作成

注3)「五・三〇事件」は、1925年5月30日、中国の上海市でデモに対してイギリス租界警察が発砲し、学生と労働者などに13人の死者と多数の負傷者が出た事件である。
中国語では「五卅惨案」と呼ぶ。またこの事件に対して、起こった一連の民衆の反帝国主義運動を、五・三〇運動（中国語：五卅運動）という。

注 4) 「張伯苓」は、中華民国の教育家・政治家であり、南開高等学校、南開大学の主な創設者であり、コロンビア大学のジョン・デューイの教え子である。

注 5) 「2 年一度のオリンピック大会」とは、1904 年セントルイスオリンピック大会と 1908 年ロンドンオリンピック大会の中間に、1906 年ギリシャの首都アテネで開催されたオリンピック大会であった。1 回しか開催されなかったため、1950 年、国際オリンピック委員会 (IOC) は、この中間オリンピック大会を公式の記録から削除した。

注 6) 「ヴェルサイユ条約」は、1919 年、パリ講和会議の結果締結された第一次世界大戦における対ドイツ講和条約である。その中に、中国の山東半島のドイツ権益は日本に与えられることに対して、反対する五四運動が盛り上がった。

注 7) 「新文化運動」は、礼教としての儒教に代表される旧道徳・旧文化を打破し、儒教批判、人道主義、文字改革、文学改革などを提唱する運動である。魯迅、胡適、李大釗、周作人などの人々が、運動の中心となった。

注 8) 全能種目とは、五種競技、十種競技、800m リレー、1600m リレーが含む全能運動である。これは極東選手権競技大会の競技種目をそのまま、「江南大学体育協会」の競技種目として追加されたことである。

注 9) 上海事変とは、1932 年 1 月、満州事変に関連して、世界の耳目を満州国からそらせあわせて上海における排日運動の高まりを抑えるために、上海で日本と中国（中華民国）の局地戦争である。

第3章 引用・参考文献

- 郝更生（1926）中国の体育・スポーツ教育．商務印書館：上海．
- 金陵大学校刊（1932）四大体育会不幸中輟．1932年11月．
- 金陵大学校刊（1932）本校体育史上翻新一頁—正式加入江大．1932年03月．
- 金陵大学校刊（1933）本校有加入江南大学体育会趨向．1933年02月．
- 小松晋治・丸山松幸（1986）中国近現代史．東京：岩波新書．
- 黎寶駿（1982）華東六大学体育連合会．上海体育史話，1982年12月，第1期，p. 13.
- 黎寶駿（1984a）華東八大学体育連合会．上海体育史話，1984年10月，第1期，p. 32.
- 黎寶駿（1984b）セント・ジョンズ大学体育史略．上海体育史話，第9期，1984年12月，p. 11—35.
- 羅時銘（1993）奥林匹克学．北京：高等教育出版社，p. 145.
- 羅時銘（2005）奧運会来到中国．北京：清華大学出版社，p. 35.
- 潘文彬（1995）中国的サッカー揺籃—上海サッカー運動半世紀 1896—1949．上海：文化出版社．
- 彭文余（1929）東吳体育紀略．東吳年刊．
- 笹島恒輔（1987）中国の体育・スポーツ史．ベーススポーツ・マガジン社：東京．
- 上海体育志（1996）上海：上海社会科学院出版社．
- 上海交通大学校史編纂委員会（2006）上海交通大学紀事：1896—2005（上卷），上海：上海交通大学出版社．
- 申報（1925）大学体育会討論セント・ジョンズ資格問題紀．1925年10月06日，第10版．
- 申報（1925）取消セント・ジョンズ在体育会資格之否決．1925年10月14日，第7版．
- 申報（1925）南洋退出華東大学体育連合会．1925年10月16日，第6版．
- 申報（1925）セント・ジョンズ自動暫停参加体育会一年．1925年10月17日，第7版．
- 申報（1926）江南大学体育協會昨日成立．1926年03月14日，第7版．
- 申報（1926）江南大学体育協會昨日開執行委員会—通過持志加入．1926年04月17日，第7版．
- 申報（1926）江大体育協會昨開執行會議—通過章程及中国公学入会等案．1926年05月01日，第11版．
- 申報（1926）昨晚華東大学体育連合会開會紀．1926年06月01日，第20版．

- 申報（1926）江大体育会執行會議之結案—キ南大学已加入。1926年09月27日，第12版。
- 申報（1928）江大執行委員會議紀。1928年03月10日，第11版。
- 申報（1928）昨晚運動裁判会常会結束。1928年03月15日，第10版。
- 申報（1928）光華大学退出江大体育協會。1928年04月14日，第11版。
- 申報（1928）江南体育会昨開第一次會議。1928年06月28日，第11版。
- 申報（1928）華東四大学体育会將開會。1928年10月19日，第11版。
- 申報（1928）江大体育会臨時會議紀。1928年11月26日，第11版。
- 申報（1929）江大体育協會執行會議紀。1929年01月14日，第11版。
- 申報（1929）江大体育会執行會議紀。1929年03月25日，第12版。
- 申報（1929）四大学体育会明開年會。1929年05月26日，第11版。
- 申報（1930）江大体育会昨開常會。1930年05月12日，第10版。
- 申報（1933）金陵大学加入江大体育協會—已經江大執委會議決通過。1933年02月28日，第13版。
- 申報（1933）瀋回春被毆事件已託弁護士進行訴訟。1933年12月29日，第12版。
- 申報（1934）交大提唱普及運動。1934年09月26日，第13版。
- 申報（1936）九屆江大運動會閉幕復旦光華並分陸上競技會—江大体育会從此壽終正寢。1936年06月01日，第20版。
- 高嶋航（2015）上海セント・ジョンス大学スポーツ小史。日本当代中国研究，4：303 - 345。
- 東吳年刊（1918）東吳大学之体育，p. 119。
- 王国平（2003）教会大学在中国—東吳大学。河北：河北教育出版社，pp. 72—73。
- 武曉桐（2017）『晨報』における学生運動に関する言論—1919年五四運動から1928年北伐まで—。国際文化研究，23：165—175。
- 犀鏡（1914）「特別記事」。東吳雜誌，1（3）：65 - 68。
- 楊恒（1923）本校サッカー編年史。東吳年刊，3（11）（体育号）：26。
- 中華全国体育協進会年刊（1928）華東大学体育連合会章程。上海：中華全国体育協進会，1928年08月，第1期，pp. 255—257。
- 中華全国体育協進会年刊（1928）華東大学体育試合細則。上海：中華全国体育協進会，1928年08月，第1期，pp. 258—263。
- 中華全国体育協進会年刊（1928）江南大学体育協會章程及細則。上海：中華全国体育協進

会, 1928年08月, 第1期, pp. 264-273.

(HP)

中国人民日報ホームページ

<http://unn.people.com.cn/GB/22220/35917/35931/2791880.html> (2017年12月08日)

結章：本研究の総括と今後の課題

結章では、ここまでの研究の総括を行い、最終的に本研究の目的であった、清朝末期から中華民国初期（1904 - 1936 年）における大学スポーツ連盟の成立過程を明らかにする。具体的には、第 1 節で本研究の総括を行い、第 2 節で今後の課題を述べ、本研究の結びとしたい。

第 1 節：本研究の総括

本節では、本研究の総括を行う。

本研究の目的は、清朝末期から中華民国初期の華東地区における大学スポーツ連盟の成立過程を明らかにすることであった。

第 1 章では、華東地区における教会学校の成立過程と教会大学の教員および学生の出自と欧米化したカリキュラムの概要を明らかにした。1870 年以降、教会における中等教育制度の確立が始まり、プロテスタント系の教会学校が多数設立された。また、当時の中国でスポーツがもっとも盛んに行われていた場所は華東地区の教会大学であったが、教会大学での目的はスポーツ選手を養成することではなく、宣教であった。しかし、多くの学校には、スター選手が存在し、新聞、雑誌などメディアに取り上げられる機会が多かったため、教会大学の関心と支援が得られことが明らかになった。そして、教会大学で活躍し、宣教のため欧米から来た教員および教会大学全体の学生の出自と欧米化したカリキュラムの概要を明らかにした。具体的には、教会大学は国語課程を軽視し、カリキュラムはより欧米化になる傾向があることについて、教会大学のセント・ジョンズを例として挙げ、教会大学の欧米化したカリキュラムの概要を考察し、華東地区の教会大学が普通の課程で学ぶだけではなく、様々なサークルが設立し、非常にスポーツが受け入れやすい環境が作ったことを明らかにした。

第 2 章では、華東地区におけるスポーツの導入および大学生が国内外競技会への出場状況を明らかにした。スポーツとしての陸上競技が中国への導入は 1890 年に教会学校のアメリカ人の李藹門教員 (Samuel. E. Smalley) によってであったことを検討した。また、1891 年中国では上海のセント・ジョンズとイギリスの工部局西童男校が中国におけるもっとも早い野球の試合が行われたが、その野球が中国へ導入される過程は明らかにしていないし、「東華六大学連合運動会」が 1915 年に年次の競技種目に野球を採り入れ、定期的にやられていたことより、野球が中国に定着したことを考察した。さらに、サッカーの中国への導入については、確実な資料が見つからず、断定することが難しいが、1890 年代ごろイギリス人によってであることが推測できることを分析した。続いて、バスケットボールは、1895 年 12 月 08 日、天津 YMCA のライアンより導入され、翌年度、正式な試合が行なわれ、中国に定着した。また、華東地区においては、1908 年頃、宣教のためにアメリカから来た YMCA 体育主事であるエクスナー (Max J. Exner) が上海でバスケットボー

ルの普及に努力したことが明らかになった。最後に、テニスが中国への導入について、いくつの説があるが、華東地区におけるテニスの導入について、もっとも早く記録は 1892 年にセント・ジョンズの学生が毎日の午後からテニスの練習が行っていることである。そして、教会学校と YMCA から中国（中華民国）代表選手が輩出されていた。華東地区の大学生が極東選手権競技大会で活躍したこと、当時の中国の大学スポーツの競技力は全国のトップクラスにあったこと、特に華東地区の大学スポーツの競技力が高かったことが明らかになった。

第 3 章では、清末から中華民国初期までに、高等教育機関におけるスポーツ連盟の成立過程を明らかにした。中華大学体育連合会の名称の由来に対する新たな検討を経て、1904 年、大学スポーツは競技スポーツの重要の一貫として、華東地区の主要な大学はその重要性を認識し、セント・ジョンズ、東呉大学、中西書院、南洋などの 4 大学から 4 名の代表が、セント・ジョンズで「中華大学体育連合会」を設立したことが明らかになった。また、

「中華大学体育連合会」が主に陸上競技会を開催し、1909 年頃、大学間の同盟関係が不安定で、学校の学生数が減少したことによって試合に出場できる学生も少なくなったため、

「中華大学体育連合会」が解散したことが明らかになった。または、1914 年 5 月、「中華大学体育連合会」の復活を目論み、蘇州の東呉大学の提案に基づき、「東華六大学体育連合運動会」が結成されたことが明らかになった。さらに、五四運動と文化運動の変革の影響で、中華民国の国情に合う体育・スポーツ思想と理論が現れ、スポーツが中国での発展を促進するだけでなく、「華東八大学体育連合会」の誕生にきっかけになった。また、セント・ジョンズの外国人教員が中国の国旗を侮辱したため、南洋の脱退とセント・ジョンズの 1 年間活動中止により、「華東八大学体育連合会」が分裂したことが明らかになった。最後に、

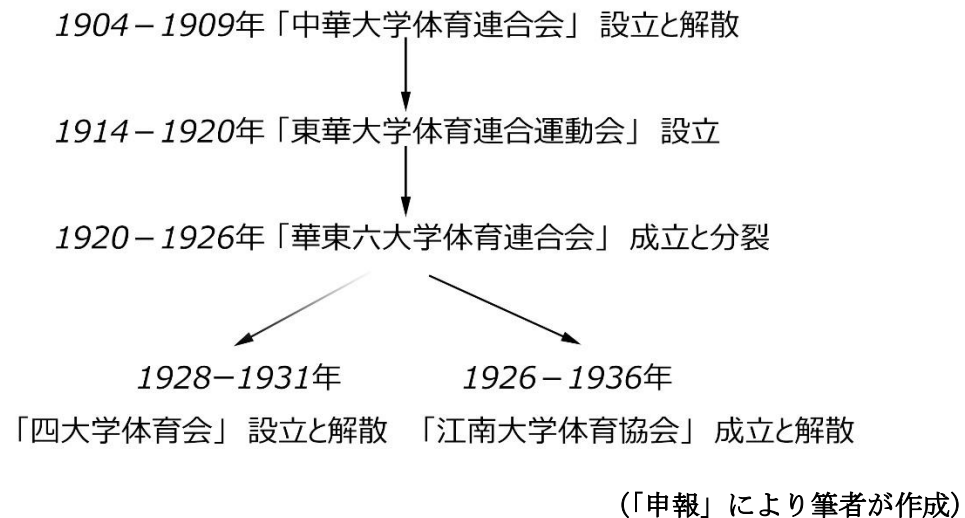
「華東八大学体育連合会」の分裂後、各大学がスポーツ交流を継続していくため、元「華東八大学体育連合会」メンバーである滬江大学、金陵大学、東呉大学、セント・ジョンズなど教会大学は、1928 年に「四大学体育会」(Big Four Conference) を設立させた。また、

「華東八大学体育連合会」の元メンバーであった南洋、復旦大学と光華大学が 1926 年から「江南大学体育協会」に発足し、1936 年までに、11 回の大会が開催されたことが明らかになった。

以上が、本研究の総括である。次節では、これまでの一連の検討によって、得られた知見から、本研究の結論について述べていく。

第2節：結論

本節では、本研究の結論として、華東地区を中心とした、中国の清朝末期から中華民国初期（1904 - 1936 年）における大学スポーツ連盟の成立過程（図：結-1）から導きだしたこと3点が挙げられる。



図結-1 大学スポーツ連盟の成立過程の概要

まず、1904年に大学のスポーツクラブ間の連絡調整、管理などの運営支援を行う「中華大学体育連合会」が組織され、中国におけるこれ以降の大学スポーツ組織の基盤となった。

つぎに、1920年に成立された「華東八大学スポーツ連盟」では、章程と試合細則が定められ、厳密な組織系統が整えられ、特に球技種目の試合はシーズン制になっており、現代球技スポーツ連盟の形になっていた。

最後に、大学スポーツ連盟は、種目が多いにもかかわらず、会長、役員などが統一で、各種目を管理し、各大学の間横の繋がり、他種目との繋がりなどが深い。

第2節：今後の課題

本研究の最後に、今後の課題として主な2点を順に挙げていく。

1点目は、華東地区における大学スポーツは、どこまで中国のスポーツを代表しうるのだろうか。それを見定めるには、教会大学を中心に検討するだけではなく、近代中国の公立・私立大学を通じて、中国他の地域、他の大学や学生以外のスポーツなどを検討し、比較する必要がある。

2点目は、教会学校の体育授業の展開について、特に、当時の教会学校は中国政府の管理外に置き、学校内の体育の提唱、体育の表現形式、体育教育、課外活動、体育専修科目の設置目的を検討し、大学スポーツ連盟の成立の繋がりについて、考察検討したい。

以上の2点が、本研究に残された課題である。

これらの課題に対して応答していく作業は、近代中国の体育・スポーツの発展過程の解明に見えるだろう。

引用・参考文献一覧

- 成都体育学院体育史研究室（1981）中国近代体育史簡編．北京：人民教育出版社．
- 陳湿明（1991）棒球運動在中国的興起与早期發展．成都体育学院学报，17（2）：21－25．
- 陳湿明，梁友德，杜克和（1990）中国棒球運動史．武漢：武漢出版社．
- 崔樂泉（1998）中国近代体育史話．北京：中華書局．
- 芳衛廉（2005）基督教高等教育在变革中的中国 1880－1950．劉家峰訳，珠海：珠海出版社．
- 法制晚报（2014）国际万象．2014 年 06 月 10 日，A24．
- F.L.H.Pott（1905）Report of St. John's College Shanghai 1904－1905, Q243－1－1446－1, p. 76．
- 顧長生（1991）宣教士与近代中国．上海：上海人民教育出版社．
- 顧長生（2004）宣教士与近代中国（增補本）．上海：上海人民教育出版社．
- 郭振（2013）中国の大学スポーツ研究：三つの時期における大学スポーツの展開，再構築および発展の検討．早稲田大学 2013 年度博士論文．
- 郝更生（1926）中国の体育・スポーツ教育．商務印書館：上海．
- 何曉夏，史静寰（1996）教会学校与中国教育近代史．広東：広東教育出版社．
- 黄新憲（1996）基督教教育与中国社会変遷（吳梓明編）．基督教教育与中国社会叢書（第三輯），福建：福建教育出版社．
- Hui－ch'ing Yen（顏惠慶）East－West Kaleidoscope. 1877－1946: An Autobiography, St. John's. University Press, 1974, p. 7．
- 金陵大学校刊（1932）四大体育会不幸中輟．1932 年 11 月．
- 金陵大学校刊（1932）本校体育史上翻新一頁－正式加入江大．1932 年 03 月．
- 金陵大学校刊（1933）本校有加入江南大学体育会趨向．1933 年 02 月．
- 交通大学校史撰写組編（1986）福開森（Ferguson）南洋公学早期歴史．西安：西安交通大学出版社，第 1 卷，p. 13．
- 杰西・格・盧茨（1988）中国教会大学史（1850－1950）．曾鉅生訳，杭州：浙江教育出版社．
- 小松晋治・丸山松幸（1986）中国近現代史．東京：岩波新書．
- 朗浄（2006）近代体育在上海．上海：上海科学院出版社．

- 雷孜知 (Michael C.Lazich) (2006) 千禧年的感召－美國第一位來華新教傳教士裨治文。
- 黎寶駿 (1982) 華東六大学体育連合会。上海体育史話，1982 年 12 月，第 1 期，p. 13.
- 黎寶駿 (1984a) 華東八大学体育連合会。上海体育史話，1984 年 10 月，第 1 期，p. 32.
- 黎寶駿 (1984b) セント・ジョーンズ大学体育史略。上海体育史話，第 9 期，1984 年 12 月，p. 11－35.
- 李輔材，文福祥，董爾智，申恩祿，鐘添發 (1991) 中国籃球運動史。武漢：武漢出版社。
- 劉建輝 (2005) 近代中国におけるプロテスタント宣教師の文化活動：上海・墨海書館を中心に。日本研究：国際日本文化研究センター紀要，30：pp. 295－304.
- 李雪 (2015) 清末期の天津における新式学校と日本人教習の教育活動。早稲田大学大学院教育学研究科紀要（別冊）23（1）：61－71.
- 陸翔千 (1936) 参加第十一回世界運動会中華代表団大事記。体育季刊，2（3）：p. 465.
- 羅時銘 (1981) 解放前の華東八大学体育連合会。体育史料第四輯，北京：人民体育出版社，1981.
- 羅時銘 (1985) 浅談キリスト教青年会は中国近代体育史上での作用。成都体育学院学报，4：18－24.
- 羅時銘 (1993) 奥林匹克学。北京：高等教育出版社，p. 145.
- 羅時銘 (2005) 奧運会来到中国。北京：清華大学出版社。
- 羅時銘，趙セン華 (2008) 中国体育史。北京：人民体育出版社。
- Mary Lamberton, St. John's University Shanghai 1879－1951, United Board for Christian Colleges in China, 1955, p.162.
- 中村敏雄ほか編 (2015) 21 世紀スポーツ大事典。大修館書店。
- 潘文彬 (1995) 中国的サッカー揺籃－上海サッカー運動半世紀 1896－1949。上海：文化出版社，p. 47.
- 彭文余 (1929) 東吳体育紀略。東吳年刊。
- 容コウ (1969) 西学東漸記。東京：平凡社。
- 笹島恒輔 (1987) 中国の体育・スポーツ史。ベーススポーツ・マガジン社：東京。
- セント・ジョーンズ大学五十年史略出版委員会 (1972) セント・ジョーンズ大学五十年史略 1879－1929，台北：台湾セント・ジョーンズ大学同学会。
- セント・ジョーンズ書院詳細章程 (1892) 上海：上海美華書館。
- 上海体育志 (1996) 上海：上海社会科学院出版社。

上海交通大学校史編纂委員會（2006）上海交通大学紀事：1896—2005（上卷），上海：上海交通大学出版社。

申報（1925）大学体育会討論セント・ジョーンズ資格問題紀。1925年10月06日，第10版。

申報（1925）取消セント・ジョーンズ在体育会資格之否決。1925年10月14日，第7版。

申報（1925）南洋退出華東大学体育連合会。1925年10月16日，第6版。

申報（1925）セント・ジョーンズ自動暫停参加体育会一年。1925年10月17日，第7版。

申報（1926）江南大学体育協會昨日成立。1926年03月14日，第7版。

申報（1926）江南大学体育協會昨日開執行委員會一通過持志加入。1926年04月17日，第7版。

申報（1926）江大体育協會昨開執行會議一通過章程及中国公学入会等案。1926年05月01日，第11版。

申報（1926）昨晚華東大学体育連合会開會紀。1926年06月01日，第20版。

申報（1926）江大体育会執行會議之結案一キ南大学已加入。1926年09月27日，第12版。

申報（1928）江大執行委員會議紀。1928年03月10日，第11版。

申報（1928）昨晚運動裁判会常会結束。1928年03月15日，第10版。

申報（1928）光華大学退出江大体育協會。1928年04月14日，第11版。

申報（1928）江南体育会昨開第一次會議。1928年06月28日，第11版。

申報（1928）華東四大学体育会将開會。1928年10月19日，第11版。

申報（1928）江大体育会臨時會議紀。1928年11月26日，第11版。

申報（1929）江大体育協會執行會議紀。1929年01月14日，第11版。

申報（1929）江大体育会執行會議紀。1929年03月25日，第12版。

申報（1929）四大学体育会明開年會。1929年05月26日，第11版。

申報（1930）江大体育会昨開常會。1930年05月12日，第10版。

申報（1933）金陵大学加入江大体育協會一已經江大執委會議決通過。1933年02月28日，第13版。

申報（1933）瀋回春被毆事件已託弁護士進行訴訟。1933年12月29日，第12版。

申報（1934）交大提唱普及運動。1934年09月26日，第13版。

申報（1936）九屆江大運動会閉幕復旦光華並分陸上競技会一江大体育会從此壽終正寢 1936年06月01日，第20版。

- 史静寰 (1999) 狄考文与司徒雷登—西方新教傳教士在華教育活動. 広東: 珠海出版社, pp. 55—56.
- 史静寰, 王立新 (1998) 基督教教育与中国知識分子 (吳梓明編). 基督教教育与中国社会從書 (第二輯), 福建: 福建教育出版社.
- 孫邦華 (2004) 教会大学在中国: 輔仁大学. 章開沅主編, 石家庄: 河北教育出版社.
- 譚雙泉 (1995) 教会大学在近現代中国. 長沙: 湖南教育出版社
- 高嶋航 (2015) 上海セント・ジョーンズ大学スポーツ小史. 日本当代中国研究, 4: 303 - 345.
- 東吳年刊 (1918) 東吳大学之体育, p. 119.
- 友添秀則 (2015) スポーツの定義. 中村敏雄ほか編, 21 世紀スポーツ大事典. 大修館書店, pp. 35—37.
- T. W. Sung (1912) Basket Ball. SJE, May.
- V. K. Yang (1917) Basket Ball Matches. SJE, March.
- 王国平 (2003) 教会大学在中国—東吳大学. 河北: 河北教育出版社, pp. 72—73.
- 王炳照等著 (1994) 中国近代教育史. 台北: 五南圖書公司.
- 王国平 (2000) 東吳大学的創辦. 蘇州大学学报, 4 (2): pp. 97—106.
- 吳文忠 (1981) 中国体育發展史. 台北: 国立教育資料館.
- 武曉桐 (2017) 『晨報』における学生運動に関する言論—1919 年五四運動から 1928 年北伐まで—. 国際文化研究, 23: 165—175.
- 犀鏡 (1914) 「特別記事」. 東吳雜誌, 1 (3): 65 - 68.
- 熊明安 (1988) 中国高等教育史. 重慶: 重慶出版社.
- 熊月之, 周武 (2007) “東方的哈佛”—セント・ジョーンズ大学管論. 社会科学, 5: pp147—163.
- 徐以驊 (1999) 教育与宗教: 作為宣教媒介的セント・ジョーンズ大学. 珠海: 珠海出版社, p. 1.
- 徐以驊 (2009) 上海セント・ジョーンズ大学 (1879—1952) 上海セント・ジョーンズ大学校史編輯員会主編, 上海: 上海人民出版社.
- 楊恒 (1923) 本校サッカー編年史. 東吳年刊, 3 (11) (体育号): 26.
- 横井和彦, 高明珠 (2017) 中国清末における留学生派遣政策の展開: 日本の留学生派遣政策との比較をふまえて. 経済学論争, 64 (1): 103—143.
- 中華全国体育協進会年刊 (1928) 華東大学体育連合会章程. 上海: 中華全国体育協進会,

1928 年 08 月，第 1 期。

中華全國體育協進會年刊（1928）華東大學體育試合細則。上海：中華全國體育協進會，1928 年 08 月，第 1 期。

中華全國體育協進會年刊（1928）江南大學體育協會章程及細則。上海：中華全國體育協進會，1928 年 08 月，第 1 期。

中華全國體育協進會編（1937）出席第十一回世界運動會中國代表團報告。上海：中華全國體育協進會。

中華統行委辦會調查特委會（2007）1901－1920 年中國基督教調查資料（修訂）。蔡詠春等譯，北京：中國社會科學出版社。

引用・参考ホームページ一覧

Brathletics

<http://www.gbrathletics.com/ic/fec.htm> (2017 年 12 月 29 日)

FIFA のオフィシャルホームページ

<http://www.fifa.com/about-fifa/who-we-are/the-game/index.html> (2017 年 12 月 27 日)

毎日頭条

<https://kknews.cc/sports/m32rjnp.html> (2017 年 12 月 14 日)

RecordChina

<http://www.recordchina.co.jp/b166836-s0-c50.html> (2017 年 12 月 28 日)

Weibo

<https://www.weibo.com/p/1001603917904331600579> (2017 年 12 月 28 日)

中国人民日報ホームページ

<http://unn.people.com.cn/GB/22220/35917/35931/2791880.html> (2017 年 12 月 08 日)

謝辞

本論文の執筆から完成に至るまでには、多くの方々の導きと支えがありました。

指導教員の友添秀則先生には、入学当初より、研究テーマが何回変わったにもかかわらず、ゼミ発表で基本的な知識から細かく教えていただき、深く感謝しております。また、先生の非常に厳しくかつ暖かいご指導をしていただいた中、私は研究の難しさを感じ、何とかこのように本論文を完成させることができました。本当にありがとうございました。

副査の深見英一郎先生、吉永武史先生には、論文公開審査会においては、色々と貴重な意見を下さったほか、普段からもいつも温かいお言葉をいただきました。また、深見英一郎先生には、スポーツ教授学特論の授業で、スポーツ指導の魅力を勉強させていただきました。吉永武史先生には、体育教育学演習と特論の授業で日本の学校教育においては、教材づくりをはじめ、体育の指導技術、体育の評価方法などで、親切丁寧なご指導をしていただきました。また、いつも毎日学校で、仕事や研究に取り組む姿を背中から学ばせていただきました。ありがとうございました。

早稲田大学オリ・パラ教育研究センターの根本想には、ゼミ発表の日本語のチェックから本論文全体の書き上げまでに支えてくれました。特に、年末の頃、手元の仕事がたくさんあるにもかかわらず、何日もの手間をかけて、私の論文の日本語のチェックをしていただきました。ありがとうございました。

スポーツ倫理学・教育学研究室の皆さまからも、多くのお力ぞえをいただきました。助手の小野雄大さんには、私と色々誤解があったかもしれないが、日々研究室を見守って、長い間お世話になりました。博士課程の梶将徳さんには、家より研究室にいる時間が多い、私の最初の研究計画書の書くことで多くの助言をいただきました。博士課程の東海林沙貴さんには、いつも私のゼミ発表で貴重な質問を出したり、発表後に研究室でアドバイスをだしていました。また、東海林さんが博論の提出前に毎日研究室でデスクの前に立てながら、努力していた姿から学ばせていました。博士課程の劉素雲さんには、同じ時期研究室に来て、「仲間」として、いつも励ましのお言葉をいただきました。博士課程の金暉さんには、よく一緒に話ながらバスで家に帰ったり、研究室でゼミ発表の準備に工夫しました。修士課程の日高裕介さんには、パワーポイントなどに丁寧な誤字脱字チェックをしていただきました。ほかにも研究室の皆さんに、本論文の執筆と普段の授業に手一杯となってしまう、研究室の仕事が疎かになってしまう私の力不足を多々補っていただきました。皆さ

まに改めて感謝の意を表したいと思います。

スポーツ倫理学・教育学研究室のOB、清華大学の郭振さんからは、研究資料の提供で多大なご協力をいただきました。また、本論文の執筆にあたり、貴重な助言をいただき、ありがとうございました。

最後に、私の能力不足で、大学院に在学中に、奨学金をもらえることはできなく、青島にいる両親からの経済的支援なしには、実現できませんでした。私が一人前になるまで、まだまだ時間がかかるが、両親への感謝の気持ちを忘れず、今後も努力していきたいと思っています。

ありがとうございました。

2018年02月14日

李 声民